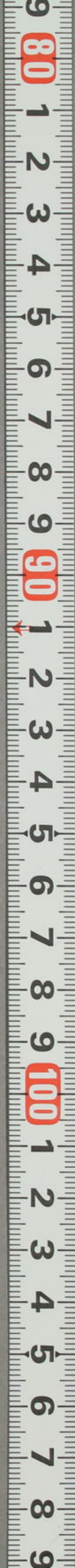


源平盛衰記圖會

四

~ 13
3309
4



八
3309
4

源平盛衰記圖會卷之四

目錄



俱梨伽羅嶽源平對陣

木曾願書筆大夫房覺明

俱梨伽羅合戰

源氏渡木曾川

真盛討死

平家落都經正返青山

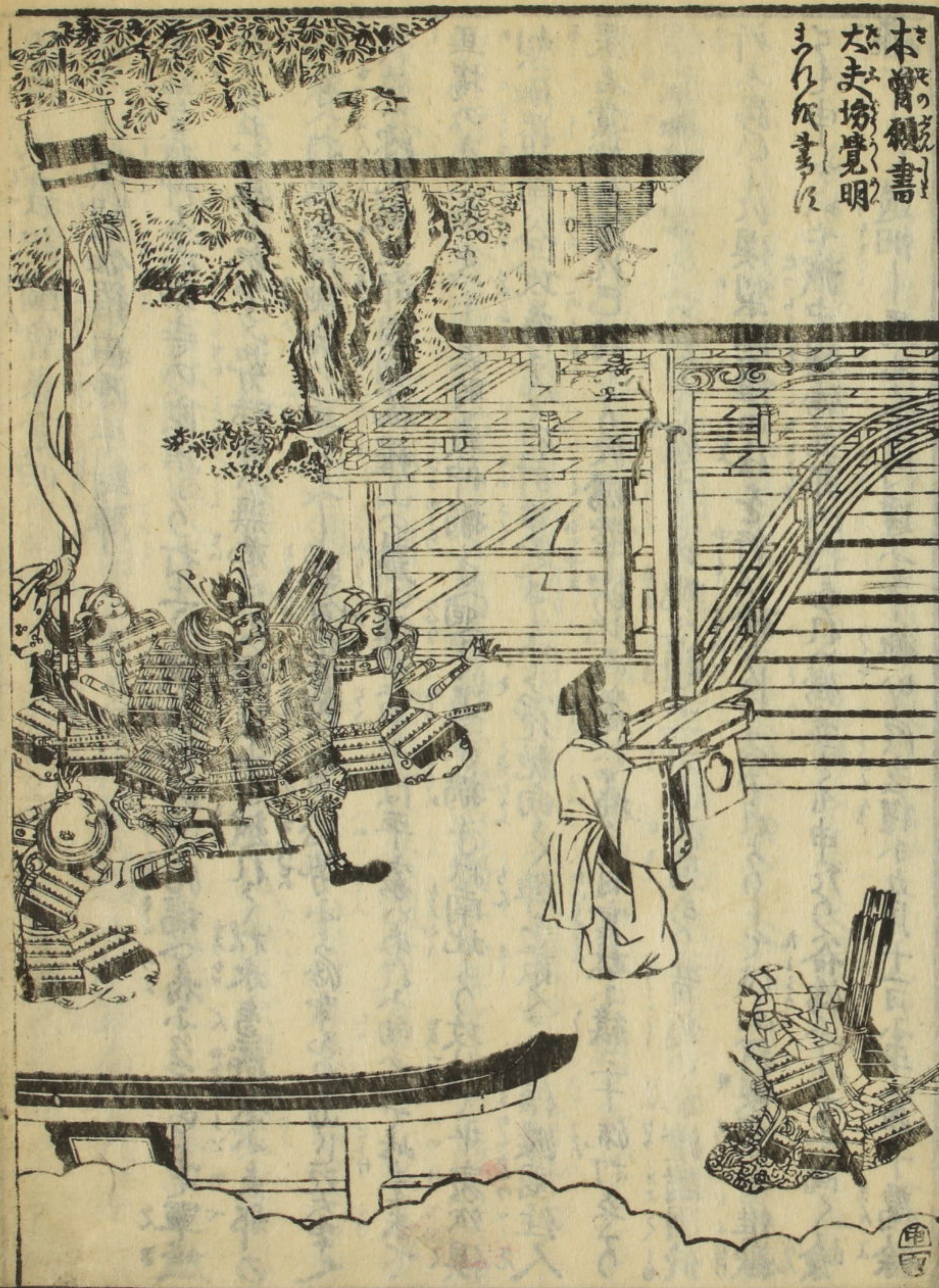
福原管弦講

政曾狼藉燒法住寺御所

大正十八年九月
本大學出版部
贈

賜征夷將軍宣旨於賴朝
 鼓判官 越 鎌 倉
 範 賴 義 經 上 洛
 高 綱 宇 治 川 先 陣
 巴 女 力 戰 殺 丹 田 家 吉
 木 曾 義 仲 於 栗 津 原 戰 死
 鷲 尾 標 一 谷 鴨 越
 生 田 森 梶 原 二 度 駈

本曾義書
 乃夫坊覺明
 三々成書



源平盛衰記圖會卷之四

俱利伽羅嶽源平對陣

本曾義仲と六動寺の國府より打上く般若野の河端へ着ふるや、中軍藏
阿のら平家い多勢味方の無勢かの礪垂山を越れ、松永を橋原小夫郎の
河原へ打出おは馳合の軍さるべし馳合れ合戦の習ひ必勢小よは幸あれゆじりたま
其故の源氏礪並部俱利伽羅山の麓小陣を取おは平家いあれ小向ふとて峠を去て
馬場の急小陣まへ其時義仲搦子廻く退子搦子に南北より攻付て平家松俱
梨伽羅南谷へ攻あえとの計策さるふも死馳向く陣を取んて信濃國住人
星名黨城を遣に已時ころに礪並山の北の麓に着く日宮林小旗三十流打さる
俱利伽羅山やつゝ加賀と越中との境之嶺小一字の依盤あり昔越の赤澄諸國候
行志あひい俱利伽羅の信を行ひ給ふりいふそれよりては山嶺俱利伽羅嶽
とも申や、かや越中國礪並郡の内あれ礪並も申たり谷深さうて山高く峻
巖いさく道細く馬も人も行違ふ幸極めけ去程本月十日小平家十萬餘

騎を二手に分て礪並志雄の志道より越中國へ打入、陣を本曾乳母子の今井四郎
城召く義仲信濃國横田河原の軍より三千餘騎はく平氏四萬餘騎も退落れ
是の敵十萬餘騎味方五萬餘騎を介して敵兵小向ふ又かれ、馳渡さるる京
家西國の馳武者味方、在國案内の荒手と思へ、安平なれば右例小付て
初七手小分て後を寄合て搦小搦之南の谷小退落さる、とて折々手分ちとて
あつらる一手の十郎藏人行家足利矣田判官代義兼、楯六郎親忠、宇野弥平
四郎行平成合落合と始りて一萬餘騎志雄山の搦手へ差を、一手根井小弥
を城大將とて二千餘騎越中國住人鱒谷次郎を案内者小付らね、警備城
打白り松永の西乃端小耳入を通く鷲尾打上り、弥勒山を引合、一手今井四郎
兼平城大將とて二千餘騎越中國住人石黒太郎光弘、高楯次郎光延と案内者
小具して松永の日宮林へ差遣、一手の樋口次郎兼光を大將とて三千餘騎加賀
國住人林家樫を具して笠野富田を打ちめ、竹橋の搦手に、右向ひれ一手の信
濃國住人余田次郎園子小中を、越訪三郎小林次郎小室を、即忠兼同小を、即

真光を大将ゆく三子孫越中園住人宮崎を即向田荒次郎兄弟と案内者あり
安樂寺代通り金峰坂を打上北黒阪を引く俱梨伽羅の嶺北西端澤原へ
差遣は一手の巴御前大將ゆく一子孫越中園住人水卷田郎同小を即案内
者ゆく警衛の藤へ名向り作は巴女と申し本曾中三権頼娘の心も剛小力も強
弓矢取ても打物取ても健持小荒馬騎の上手ゆく去は養和元年信濃國横田
の軍にも向ふ敵七騎討捕く高名をとりられいつくも召具して一方の大將ふと遣
されり一手の本曾義仲三萬餘騎少く小矢色河を打渡り垣生庄小陣を取勢乃
かみ成見せしむると加頼子原榊原小引隠し平家の旗並山俱梨伽羅嶺を打城く
阪を東へおせつ遙小鉢下成見つせは日宮林小白旗四五十流打まうアハ源氏も
寄たるい山四方巖石く敵左右なくも寄せし能登路志雄山を指固ぬ西を清
方の勢く東の口方の所高く峻して道狭たれ源氏小矢種を射たせよとて俱梨
伽羅堂園見榊馬場の塔橋は急小坂赤旗山を固く小矢並たを秋田の秋暮時雨小澤と
たる丹楓もあやせ見えく風海源氏の良計を帷幕の中小めらして左右もあやせ

源平兩陣の間二町少のむさるる來

本曾願書筆大夫房覺明

本曾を軍城曾く急りま四方を屹せ見渡厚北の山端小苗く夏の縁乃
本間より緋玉垣風小見えく片割造の社檀あり山林高く聳て鳥居若葉せり
本曾の當園住人池田次郎忠康致召て阿毛の竹宮を申せいはる神を祝せりやせ
尋ふは言て八幡宮致祀進せ侍あが垣生庄小在の垣生新八幡と申候といふ本曾大
悦く手書の大支房覺明を召れりは僧の原勸學院の文章博士進士藏人通廣
也の者へ出家りく西乘坊信教中政く南都小祐筆して居りる信後小高倉の宮
御謀致の時三井寺より南都牒状を贈く同公與力して宮とも助けたり佛法破
滅をも見終へしや返状を此信教小書をりる本曾家の能書博識なれは種々
小色紙書の中は太政入道淨海平家の糟糠武家の塵芥也書たりる或入道風小
同て安めぬ事とて其信教を爲出討致せよと處々復ひはれ南都小安堵し
難しと漆を湯沸して身小沐浴服し頼人の如く不成く南都を迷せく東國へ

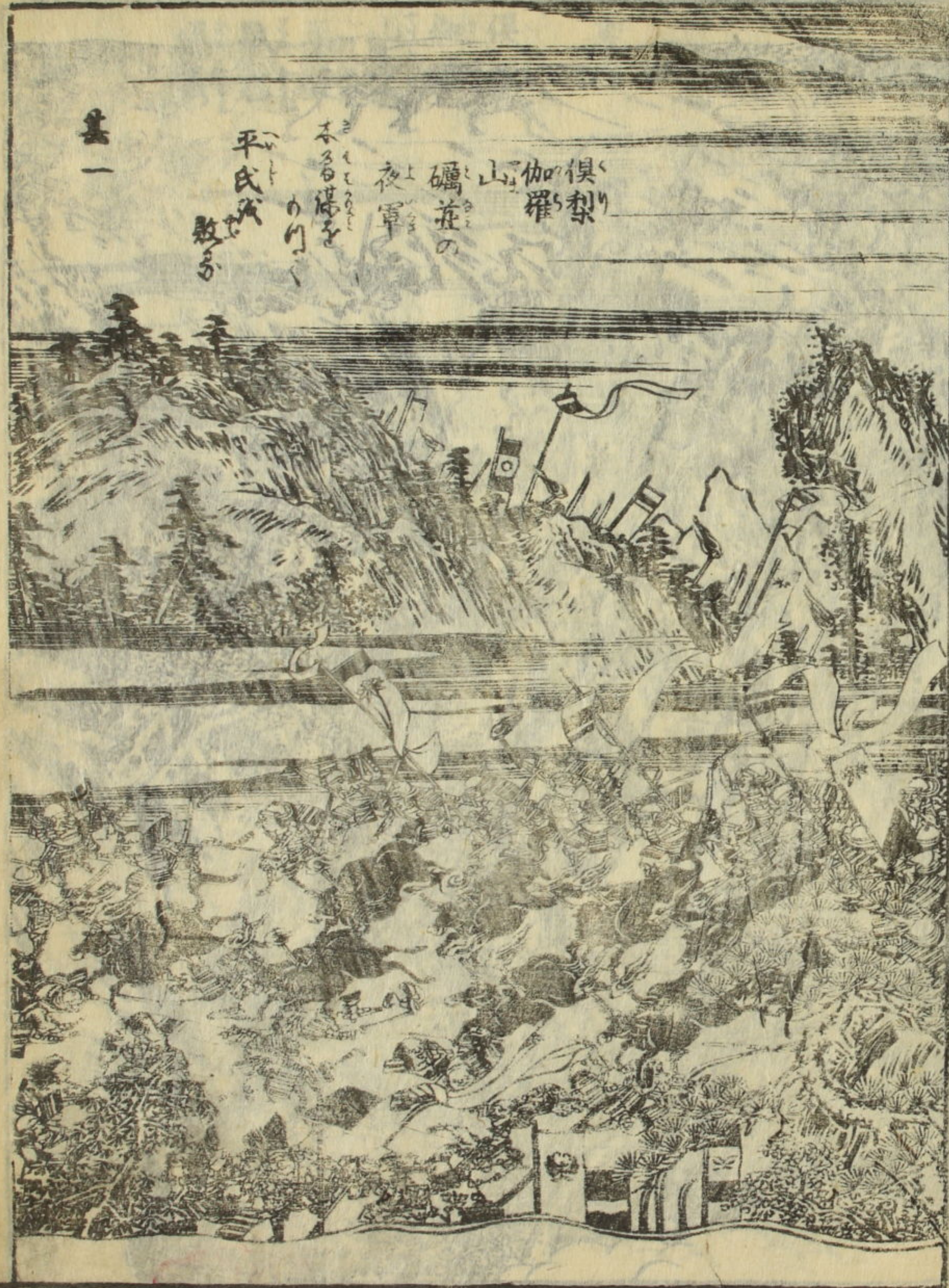
下墨俣川中十郎藏人行家城憑湯浴しられ之誠の癩病なぬ速小平愈し
本此信救せり行家冬河國府より伊勢を神宮へ献る祭文も信救せ書る
行家兵衛佐小中違信濃城なる時又本曾小隨ひり本曾信救を改て古山
法師小作成本曾大支坊覺明也本曾義仲より後又信州小澤より世のりるを
親し師土門へ入る林右念佛多し其小親也
聖人の清光と成信州康樂寺の祖師とあり西佛上人とあり其外白山三箇の馬場の願書も信覺明書り弟小自
在を傳く詞小徳を兼たれ本曾宣ひり本曾大支破幸に當國新八幡宮御寶本
近きまて合戦を以て人との今夜の軍小勝人軍疑あり且後代の爲目一當時の將
小願書一紙社殿小納を存に其相討ひり命に覺明馬より下本曾前下跪
て籠の中より矢を射り墨を筆小和して疊紙を深只古物を写り如く案にも及
これれを書り後世に願書名文ありとて世に賞は其文曰
歸命頂禮八幡大菩薩日域朝廷之本主累世明君之曩祖為守實祚為
利蒼生改三身之金容開三所之權扉爰累年之間有平相國次管領四
海惱乱萬民猥蔑萬乘焚諸寺已是佛法之離王法之敵也義仲苟生弓

馬之家僅繼其衰之塵見聞彼暴惡不能顧思慮任運於天道投身於國
家試起義兵欲退凶器鬪戰雖合兩家之陣士卒未得一塵之勇之處今
於一陣上旌之戰場忽拜三所和光之社壇機感之純熟已明凶徒之誅
戮無疑矣降歡喜之淚銘渴仰於騰就中曾祖父前陸奥守義家朝臣寄
附身於宗廟氏族自顯名於八幡太即以降為其門業者無不歸敬矣義
仲為其後胤傾頭羊久今起此大功喻如嬰兒以螻量巨海螻娘取芥向
奔車然間為君為國起之為身為私不起志之至神鑒在暗憑哉悅哉伏
願冥慮加威靈神力勝決一時怨退四方然則丹祈相叶冥慮幽賢可
成加護者先令見一之瑞相給仍祈誓如件

壽永二年五月十一日

源義仲告白

と書たりる覺明其日の裝束西裾の獲直垂小首丁頼巾一七橋繩日の曹り
黒羽の征衣負て三人をすれ赤銅他を刀佩金巻藤の弓脇小挟く左小願書紙捲け
右の手小箆と持てせねる哀文武両道の達人哉と人々賞りりは願書と十三

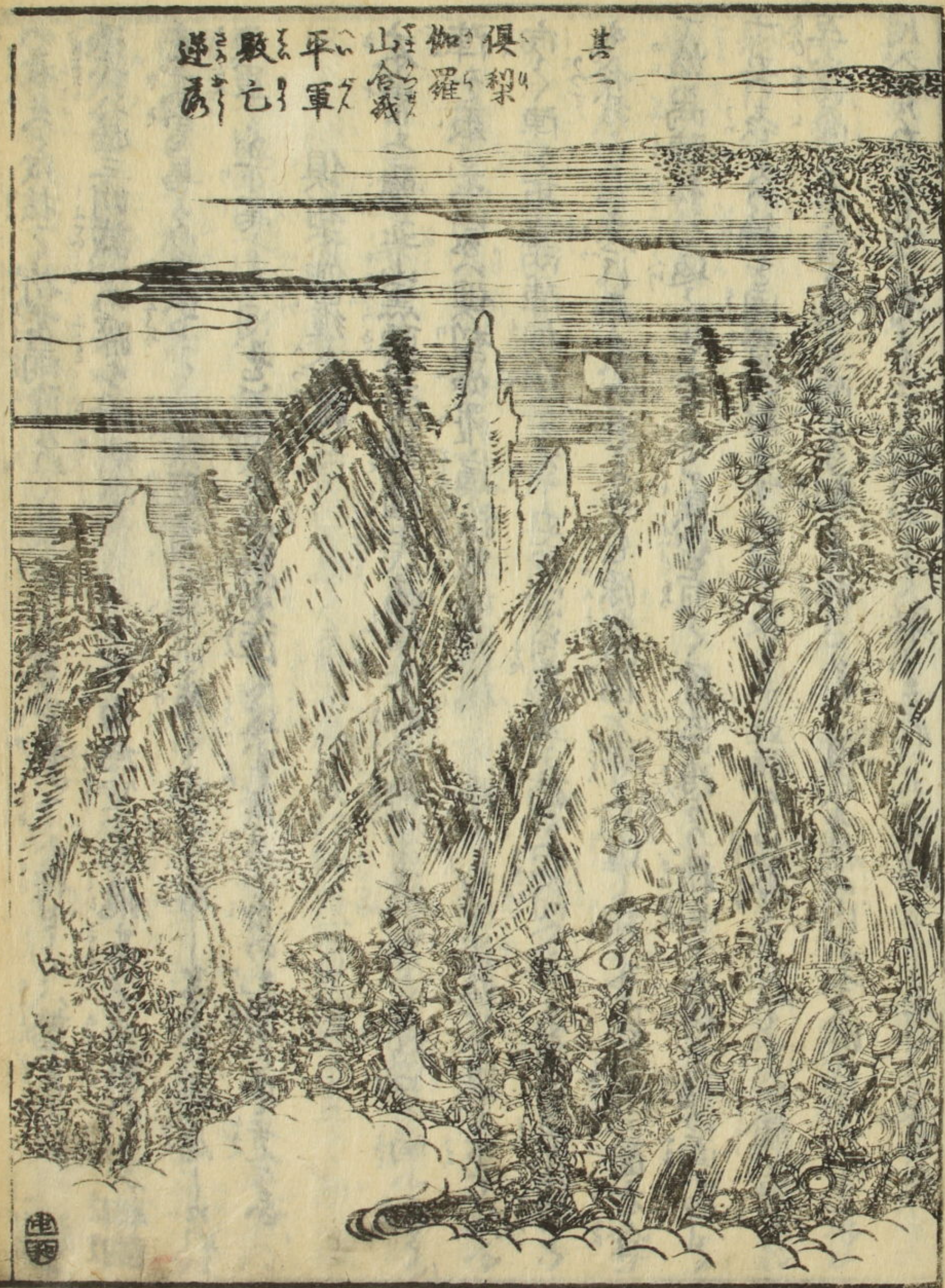


其一

俱梨加山礪並の夜軍
本多康元
平氏成
敷子



其二
俱梨
伽羅
山會
平軍
敗亡
逆



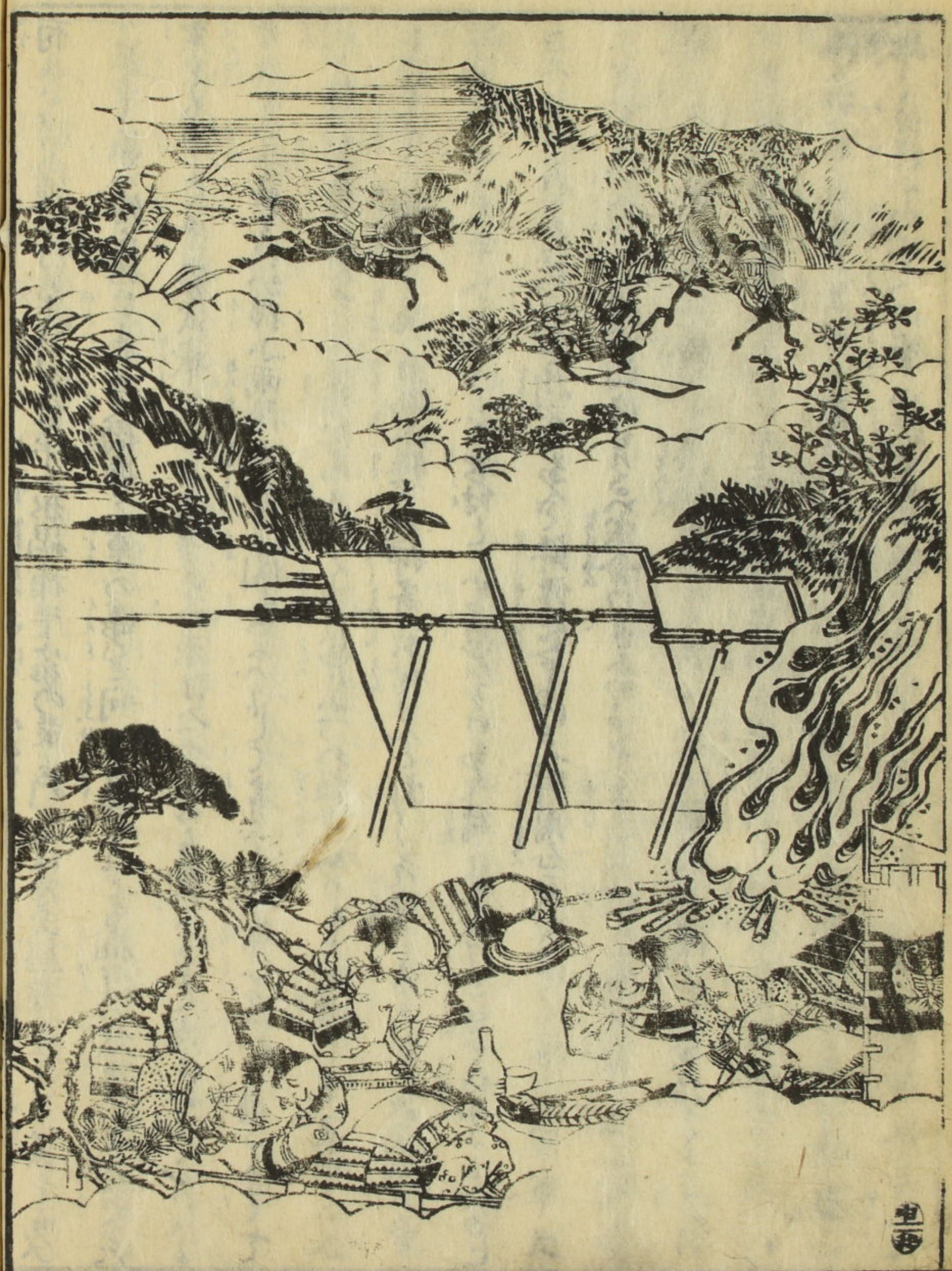
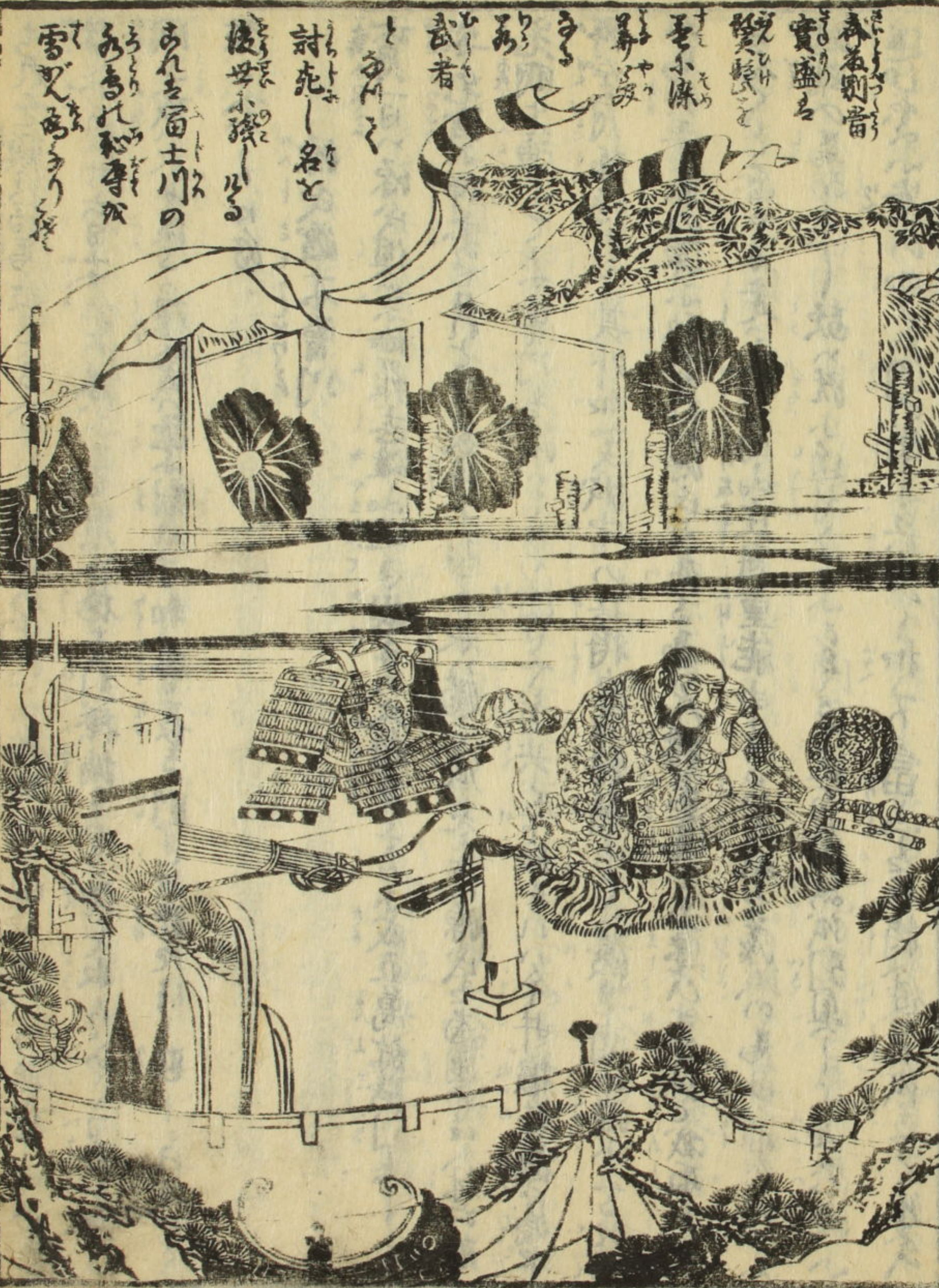
の表夫と云はれ、折は雨降、其の義者、男、善の、下、持、せ、く、播、高、の、社、殿、を、
懸、入、備、三、所、誠、心、の、深、を、御、然、受、あ、り、る、也、白、鳩、空、を、飛、本、そ、白、旗、乃、上、の、翻、
也、本、曾、馬、より、覆、下、く、甲、汝、腹、背、を、地、小、着、く、あ、れ、を、指、し、も、大、將、角、一、は、れ、
軍、下、馬、一、七、回、を、物、以、平、家、の、先、陣、も、遠、く、な、り、此、の、も、聖、く、是、也、云、云、

俱利伽羅合戰

本曾と確並、黨、改、の、北、の、持、恒、失、儀、林、と、れ、水、柳、原、河、邊、の、黒、坂、口、の、南、小、向、
陣、を、取、り、平、家、へ、俱、利、伽、羅、嶺、後、馬、場、檣、橋、と、り、地、も、黒、坂、口、小、進、下、て、北、小、
向、く、陣、を、取、り、兩、陣、相、向、し、る、事、立、六、段、の、互、小、橋、を、突、向、し、り、本、曾、を、勢、汝、待、
も、合、我、を、は、急、に、平、家、の、方、より、も、源、氏、の、橋、と、守、り、進、め、我、事、は、三、箇、を、合、守、
て、後、の、兩、陣、勢、を、返、し、せ、あ、り、る、良、將、有、く、源、氏、の、陣、より、精、兵、十、五、騎、を、橋、の、面、小、出、し、
十、六、の、表、夫、の、橋、を、同、音、小、射、す、り、平、家、も、十、五、騎、を、出、合、し、あ、れ、も、十、六、の、橋、と、射、
互、小、橋、負、互、に、進、め、り、も、陣、より、制、し、て、招、き、し、れ、も、源、氏、の、橋、の、内、小、入、り、源、氏、合、し、平、家、も、
同、小、入、り、と、り、有、く、二十、騎、出、し、射、し、ま、れ、い、又、二十、騎、出、し、合、せ、く、會、合、す、

三十騎、五十騎、也、合、せ、く、射、し、れ、も、互、小、橋、負、互、に、斯、擧、ぐ、日、既、晚、し、本、曾、の、後、の、
小、向、り、橋、を、汝、待、く、追、手、橋、幸、神、守、と、南、北、合、追、落、し、計、り、平、家、あ、れ、を、差、あ、り、
知、り、て、會、合、す、無、懸、也、頃、は、五、月、十、日、夜、半、を、成、ふ、事、五、月、の、を、乃、辭、す、也、
懸、小、懸、は、月、初、夏、山、の、木、下、齋、と、細、道、小、原、平、互、小、身、分、は、平、家、若、表、討、も、あ、り、せ、
打、解、度、へ、な、く、大、將、より、下、知、り、な、き、は、遠、路、を、來、り、應、じ、る、度、若、あ、り、也、曾、の、袖、と、り、
後、甲、の、符、を、梳、り、し、後、も、知、り、外、小、向、り、源、氏、を、追、手、橋、を、挿、り、用、意、し、り、平、家、
由、に、橋、に、汝、即、無、光、橋、も、小、向、り、三十、餘、騎、俱、利、伽、羅、の、絶、頂、小、也、橋、國、の、飛、火、
を、揚、げ、り、軍、兵、も、見、え、く、數、百、の、を、數、を、指、し、一、數、千、の、法、螺、貝、吹、響、ま、れ、大、將、
軍、義、仲、を、追、手、也、牛、四、五、百、匹、集、り、南、小、懸、橋、に、結、付、一、度、小、懸、し、ま、く、無、二、無、
三、小、平、家、の、陣、へ、追、ま、り、松、明、山、風、小、懸、し、り、頭、を、焦、せ、も、如、く、あ、れ、は、荒、を、り、平、家、の、
陣、小、向、り、橋、口、汝、即、を、林、富、禮、を、打、具、し、く、中、山、を、上、り、藤、原、一、押、し、也、根、井、
小、彌、を、二十、餘、騎、今、井、四、郎、二、十、餘、騎、小、室、五、郎、三、十、餘、騎、巴、女、十、餘、騎、五、郎、一、
は、美、合、せ、く、一、萬、餘、騎、北、黒、坂、南、黒、坂、を、打、也、一、國、を、他、を、取、也、打、法、螺、と、吹、本、平、

萱草とわらわの墓日備を射上りて轟々斬られの差敵く幾千萬の勢
ともわれき本曾そな成も牛此角の相明を斬りて下知て平家の軍中へ退るる
胡顔本原柳原上野も小振る軍兵三萬餘騎を合せ喚ひ叫ぶ黒坂押家
於後田萬餘騎の國の声山も岩も岩も捲くと懸く道は狭く山も一
中進む兵も多し退り搦手つふあんと攻むる平家の軍の中へ取籠れ軍
明日はあんと油のりてりるにさひそり成小園依作とてその表平家
ささやうせんと東西を先ひ周章馳せり取らる者も多しこれに成成の負とも
忘れ攪を着く兜を冠け左の一振り二人二人取付馬一張の四五人搦手馬小の逆
小糸く後へ馳せ或は長ひの攻進小突く自足を突くも多しなりはれ踏殺
され踏殺する者も多し王の馬を取らる主をたれ親の物具と着て親を顧み只
只れさうふと争とも西へ搦手へ東追ひ北を岩石高しとせりる搦手南を
谷深しとせりる便に圓く圍み案内を知られめをせりる方角成てふは
あき方右に搦手へ西へ搦手後に加賀の味方とせりる安法と思ひのりはる小後軍を
敵の寄る危しとせりる思ひなれ唯つふ争とてはあ打敷くか成國のり者も
若ともせ呼まわれも搦手雲原の如く退り上りよ攻守れは先陣後陣の押
まれく通り南の谷へ下りて退り思慮や有る白衣束とせりる平家斗南黒
坂の谷原に取籠れ退りて源兵を打たれ平家あれを見り五百餘騎
連へ退りてはれ後陣の大勢もあ見くはれ是かよけしはれはれ陣も
かかられとせりる父高月原もあ見くはれ是かよけしはれはれ陣も
人小馬跡とせりる馳重て平家一萬八千餘騎十餘丈の便利か加羅台へあれ
はれあふ高とせりる今高月原もあ見くはれ是かよけしはれはれ陣も
高坂の如く小死なれも大勢の傾まはる勢の中へ敵と細く死とせりる者も
はれはれあふ高とせりる馳重て平家一萬八千餘騎十餘丈の便利か加羅台へあれ
守知度と赤地錦の直垂小紫襦袢の覆ふ黒麻毛の馬小駢り西の山に掃成北
向く五十餘騎相見とせりる声を上級を打て敵の中へ馳入れはれはれ兵衛
依為盛更
後直垂小紫襦袢の直垂小紫襦袢の覆ふ黒麻毛の馬小駢り西の山に掃成北
向く五十餘騎相見とせりる声を上級を打て敵の中へ馳入れはれはれ兵衛
依為盛更



これを頼る馬疲るる人あれ其衣の中に一匹馬水小満れ亡り無徳とて
其のあつた日安宅の邊小舟着る橋を引搦捕をせ陣を取らぬ日敷を行
回小舟水小流る親族或は敵討れる即等長と別ま死たは、悲一に成り
降る人ありり

源氏渡本曾門

六月一日源氏俱利伽羅志雄山追手搦手の大將軍まじり成五萬餘騎引具し
安宅渡小押寄せられ平家橋を引り水濁底見え源氏志雄團の住人林六郎
光明先陣して本曾門を渡せりわ渡せや者共と下知され今井根井榎尾守
野全月敵務上下其外加多敏中の兵將五百餘騎よくお渡り南の陸小く
の馬共平家の陣小馳入れ源氏おる人鞍を馬もほひまれを我面て
らんくと面く走るの畠山庄司重能申すおれを源人の馬共難は河
願踏の馬あふ一敵は既小迫付るふをそ三百餘騎引具して安宅渡小
進む安宅案の如く河の南に兵多くおる畠山平將使者候多く源氏

まじり小渡を渡して作先陣重能仕置一や申す源氏の本曾門に
まじり赤旗三四流揚上るの難ある人と同いおれを志雄の畠山と覺能河と
見能たると同い兼光と時々武藏(越能)一畠山穴城をば見能て作と
申すは勢い然三百騎おるは本曾門の四代の孫能敵たれ馳合の軍勢七敵と
見王より八代の後胤村岡五郎重門より四代の孫能敵たれ馳合の軍勢七敵と
御守も一多く押寄く我(一)先畠山兼光先陣仕置と下知されいま作はぬ
こま一番小榎は源兼光百五十騎元來約束の事平家の二人源氏の人と完
たれ畠山三百騎小榎は百五十騎を相具して押寄り畠山隊伍をれは鶴翼陣
こま鶴の羽おる者たれ如く小勢はさへて小舟中取流る之榎口の魚鱗の陣せ
先細中へ小魚の鱗とさる様馬の鼻を並畠山三百騎榎は百五十騎と
兼光も兼光が小勢重能大勢はんと打敗く出出さるれ巻れく山流て敵
さるれ流て討り討れぬ五夜まで我討ひぬ畠山勢二百騎討りて百騎小成
榎の舟も百騎討りて五十騎おる其後源平の諸將かよく出く相戦ふ事時を

西陣乱れ合へ白旗赤旗相交へ天小翻る幸夥し馬の馳違ふ音夫甲の声まよき
動くらんや音んうり蹴る塵埃を空に充滿し朝霧のまが如くあり

真盛討死

平家の侍士武藏國住人長井齊藤別當真盛七十有餘年園より八日後景期より
幸し終小通き身おはれ何國も死な今同事と思ひ切く赤地の錦の襪直垂小
黒糸織の襪を肴十八名石打の征矢負て只一人進出て死生勿れ我れ本曾の子
小信濃國住人平塚太郎光盛より者なり真盛成貞より告せよ真盛も又平塚小
月と名て進くる手塚進家て誰か一人を殘留し軍を大將軍侍士に思
一名をれ斯申し信濃國諏訪那住人平塚太郎金刺光盛といふ者之能故に名
象給や組めと云ふ互小駒と早めり真盛申るい戲呼去者と思ふ細有て
名をぬい汝汝嫌ふ非れ只肯と取源氏の見奉ふよ徳所領の便あり徒小
淵原小捨より本曾殿の身給給ふまゝ一切れを我れ只一人留し相戦ふ敵と
逢り軍の習ひを勝負成するを面白れ者合を平塚と云傳ふらとけし

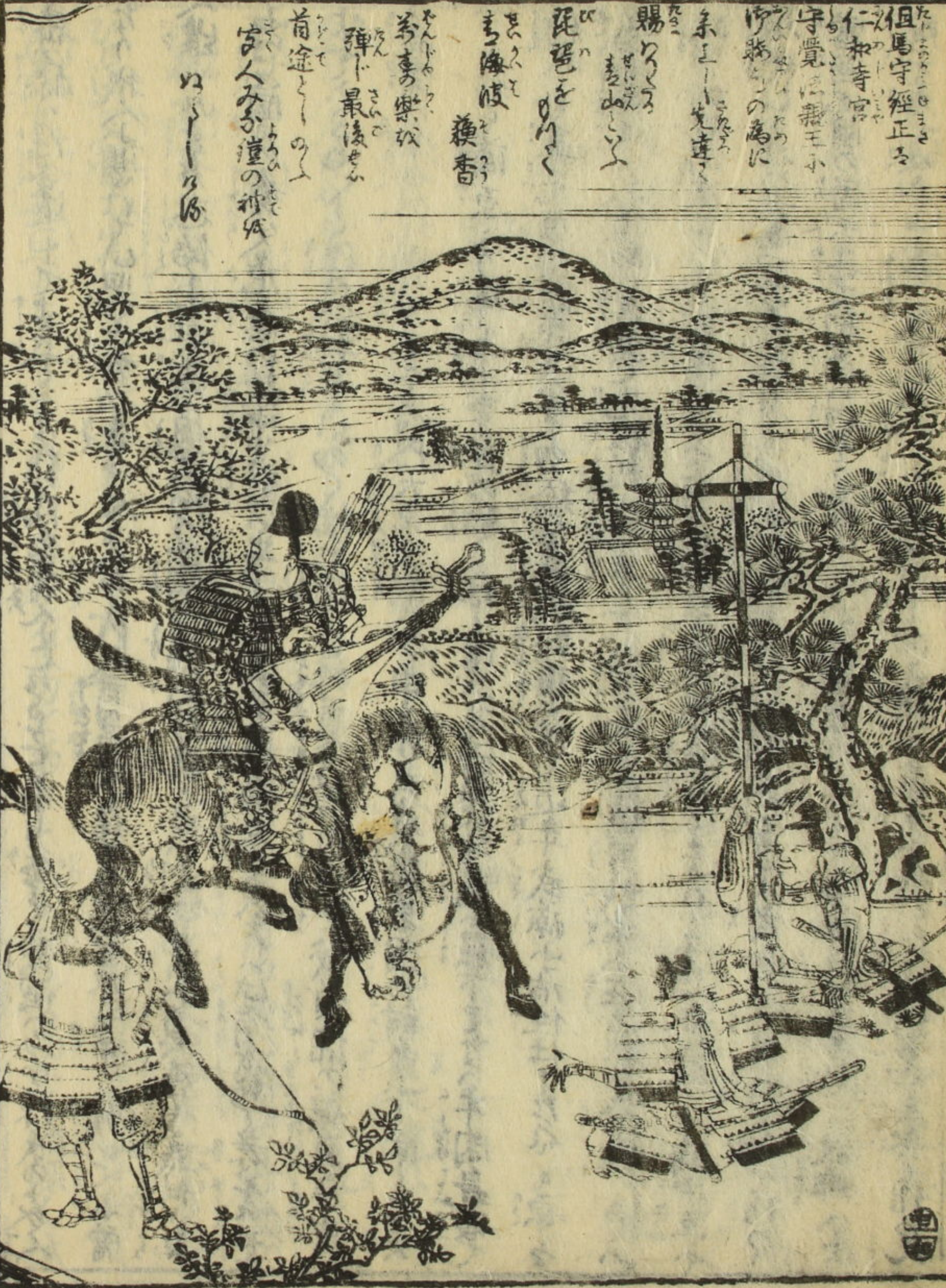
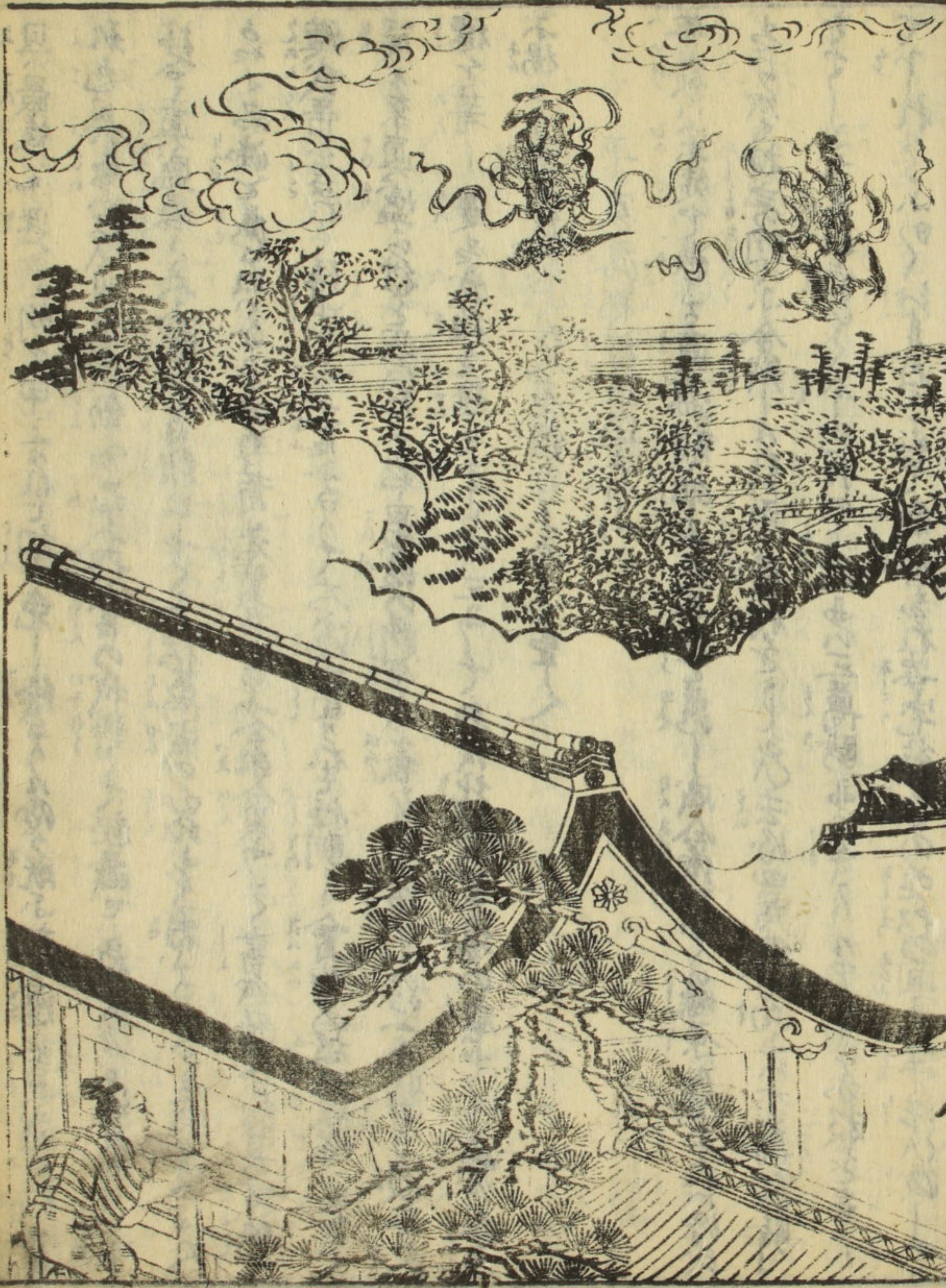
下小迎く手塚り即等主小細せりと馬子小並く中隔り真盛細並く無手と組
已手塚り即等也待まらむ停小體の押付の板と度多左の手を小細より左右
の體成強く踏く引離し馬の腹小引付て提より更れ地より馬平より手塚是成
見く即等公討りて馳並く敵の體の袖小纏付く由音波生し燈を振て三人組合
て馬より下小落りりる真盛手塚が即等と押へり刀と接頭を撞落し手塚其間小
真盛より手塚を搦引よく柄も巻くと透れ拵通し懸し上小茶頸と水もたまはれ
如より手塚敵の首成即等持合て本曾義仲の首持以申る又真盛を尋者
の頸取て作名宗と申ては存ま由有あれ名宗は本曾後御孫一和と計りて
終小名宗は侍士と見れと錦直垂を服り大將軍と思へ續く母もは京家西國
の者かと思へ坂東声へ着き者かと思へ面の皺七十餘小老をり老武者かと思へ
一七盛を見も何者の首かと思へ申し本曾殿打案して衰武藏の赤藤別當小
や育る個一其一年に折れ白旗の糟屋小生りり今殊小白旗小成り人
小整頓の黒さ何やら人の老様とせよ賢也実小不審へ樋口古岡傳見知る

らんとて召れり警放取の仰もて一月打見の候をさしと流く穴無懸を真盛と
作くと申に何の道か漢の思とて同めい極口され其幸思ひ出れ侍と真盛同順申
依ひし弓矢取身の老體也軍陣小向之矢髪小墨液塗る思之其故の言致り
時ふも若さへ白髪を見くあさる心なり況戰場小進人せすれい古老氣かや惡
退時今分分叶いと誘え實小老と先を待ひても憚あり又敵も甲斐が次第
惡よの老の白髪中けふ後成卿述懐の致小

澤ふ生さる茶あねむつとほふ年とほむと袖をぬれり

と後侍りしや人の御の言葉申と後の取見と強盛さ幸も又侍るとは不違は事成
塗る作ひなり年来内外申し其表も極は即兼光侍の池水ゆく自され洗され
要のされ落く白髪の尉中成なる極は一定真盛をい知るなり極の許由耳頼川
の流小滞く名は後代もぬれ我朝の真盛は女と我場小染て悲を萬人催せり本曾重
ひらり又帯刀先生と惡源大義平討りり時義仲三三歳さくあけりと畱小何く
尋出り既小下りと令せりといは雅者小刀と商人と我を給り由り情深くは

存藤の許へ遣して事とされい流るる人なりとて簡目委く東國へも源氏の家人
なり我人小傳りてい見と貴ひきき人なり又高きもゆりりせり業頼ひて本曾
（遣）る芳志偏し真盛が恩小河う一樹の流一河の流りい例もめい真盛も義仲は
小江國の養父危急の款中と討い出りり其事情争志きあれい首成修孝させ
よとくさめくと流の兵共おのく袖と枝も作真盛石打の征矢液首綿の續直垂成
者幸い今及北國へ下りり内大臣宗盛を申上りり真盛東國の討手小向て夫
も如き浦原より陽上り幸老の恥と存し作ひさば北陸道小松下りり六年國身表て
侍れりも真先鬼討死せん幸勿論之真盛所領討て近年武藏小治任はたれも京之
北東國は北國の舊里先祖利仁將軍三之の男子と産嫡男被小在あり存儀い
以男加賀小在されを富樫せり三男誠中在ありと井口とよりり子志島國田三小
相親じされ三箇國宗徒の者共内戚外戚討て親類一門あり者も真盛討死て作
富國他國の者共集り別あり何と看するも後東國を看見海は又幸死り故郷へ
移さるて改りり幸文あれい今度生國の下向小錦の直忠石打征矢御免と家作り



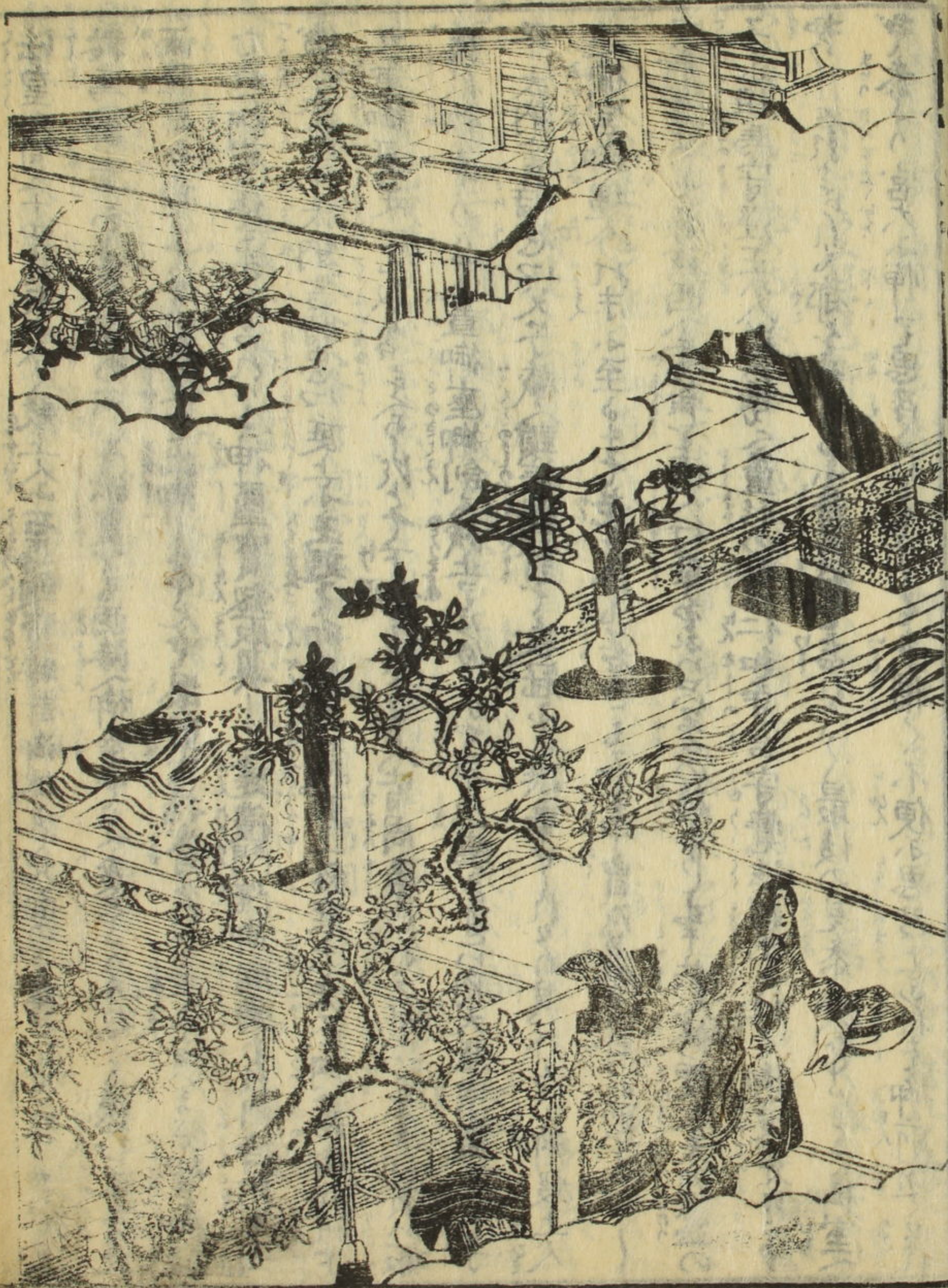
但馬守經正
 仁和寺宮
 守覺に親王
 伊勢の爲に
 未正一先導
 賜りける
 喜ぶし
 琵琶を
 まんて
 去降波 換香
 爲喜樂故
 彈ト最後
 前途トの
 官人みか達の神代
 ぬーー

回最後の事思ふに物を申上るを初之免一給り給ふ所不打立原上真盛思切る
秋色具長ふ之に且軍政勅人給ふ内言の我計之秘藏せられたるに依るに下
録に真盛畏く大敵の有難くなく十社為敵の死を看ふるに是は皆大
名小名流とあはれかそそ昔本買長とて之を命守りて書成後其其才聴て
漢武帝とされ侍中として官するて大に漢書を位副一會智の故郷(海島)く
陽々来真盛を思ひける也最後の所をも表なれ又免一給ふも此の故と文
徳を著し是を武雄を越え年七十二ありて身成北國の軍場の塵せり之を天
子揚りりる武門に人人を鑑めたる事人

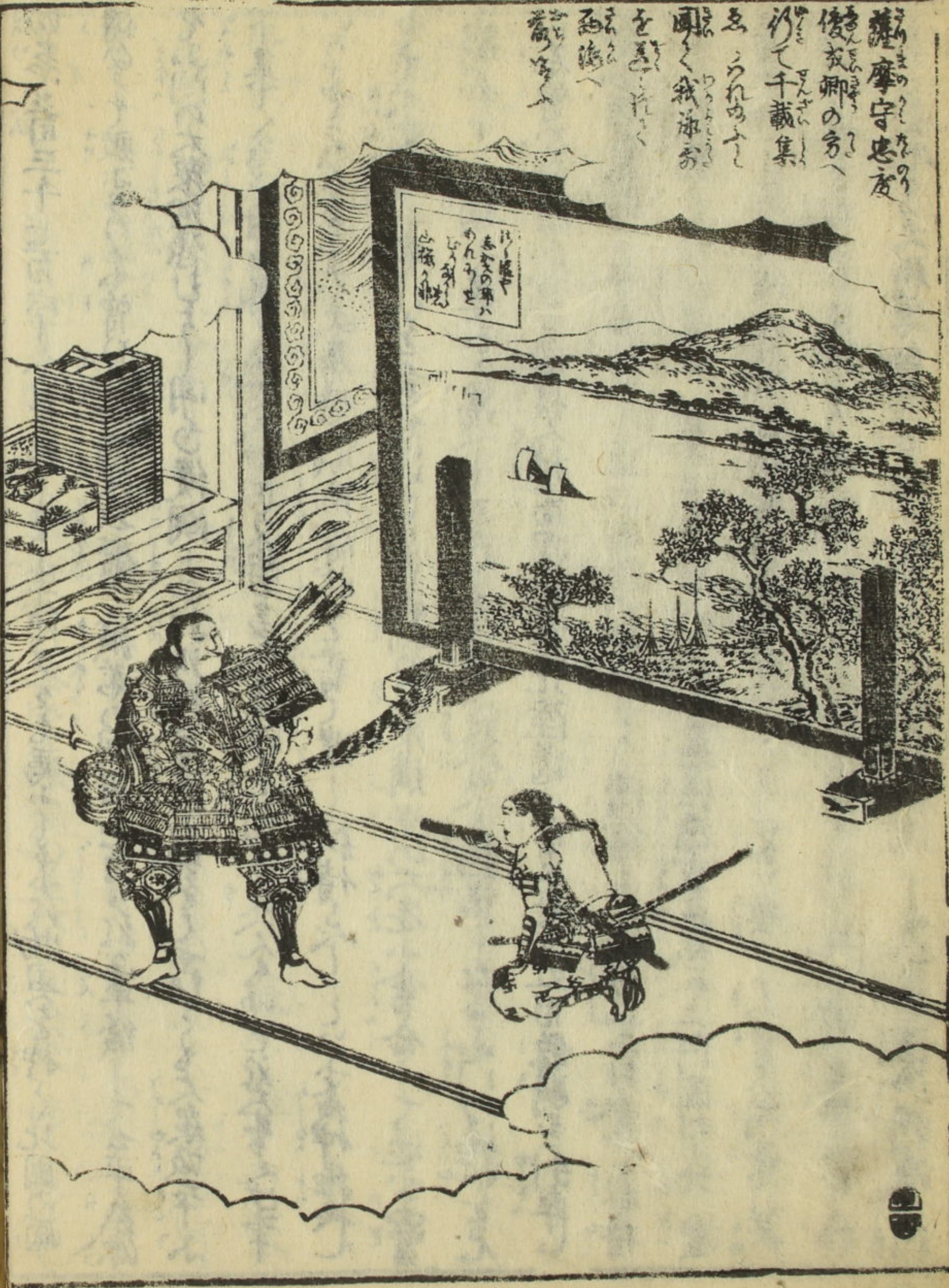
平家落都經正返青山

平家の子徒や憑る真盛討死して大兵力と為一威合引く鎌原陣とれ源氏
を分たも押寄物く小合戦にれ平家利をりしあまは四月の下向の十萬餘騎
かやう一七萬騎亡ひく今六月の上洛の二萬騎也さうりるを平家叔を長
て下られたる小の討進ぬるを無慙され空宅藤原の並ねの同く平家後して

切多首三千七百六十人存経は生後くも馬おも身は物具を捨く北國の浦
傳ひて殿ふり本曾は北陸道法懸一城本國府小有は軍儀して平家源
々山門の大衆城憑むり南の縦湖上小取法信(法信)小駒をくやむとも大衆坂平小
下集り方付を頼く都へ入りて又勢多の長橋を引く支へんもゆじは事人
いりやんたる小大吏房覺明即牒状を書き遣一紙情なくとて長仲物長し
やそ大吏房小書札を書せ送さる山門の大衆講堂の大を小會合して遠小本曾
小向か山嶺小遠火を揚へしそれを相圖小攻めと約諾なる山門の返状を見
て本曾は入加交國任人林南櫻一黨北陸道の勇士等五百餘騎を引率し
大吏房覺明を先鋒として近江國湖の浦より漕渡りて天台山小打登りて懸持
院を城廓とて惡俗小白井法橋幸明慈雲坊法橋寬覺二上阿闍梨珍慶
等依始りて三塔院の大衆老若甲冑次第しり衆と携て本曾小同意其
猛勢峰々谷々小充滿り既小都へ入るに中を新三任中將真盛を寄作
より系へらる大將軍知盛重衡の兩人を山階より引返しぬひり院新後白阿



薩摩守忠房
 俊成卿の方へ
 以て千載集
 を呈し奉る
 前々々々



法皇も同二十四日表入殿上人石馬頭資時計御伴之北面の下鶴二分されて共ひく
鞍馬御幸ある平家の門之法皇も西海御幸やと度きりたりとも憑ひ本年に
雨降るり地々より主上を出御し多く風輦被指寄られた主上をいまご幼き御殿
たれ何れあるか召れらる神璽寶鏡取具し建禮門院御同輿お内侍所も同
俊入奉り平大納言時忠に庭上之廻り印鑑時簡玄上鈴鹿大床子河務御叙以下
九重御具足も取寄せり以下下知されり人皆周章のれりお出されけり取
落し物多りし書御座御劍も破止りしは早く早出輿お内大臣宗盛公父子
平大納言時忠に父子藏人頭信基計り夜冠も供奉されり其外も公卿殿上人
近衛宮御繩介れ末小至りませ老きも若きも甲冑被著し弓矢前を帯り
て打立られ七條河原西へ朱雀と南へ行幸あり只後の様あり事共之修理大夫經盛の
子小但馬守正入道の甥へ童形の時に仁和寺宮守覺法親王小仕り御愛弟に
おつれり都を流るる昔の好を忘りし最後の見参り入るり御室へ
お参り宮大御思召りしもも糸惜く不便お思召りしを御前通され

系經正有難は成りまされま奉りし御茶迫り召れらる幸は身小降りし柵下積
多し青山の御形見とを思ひ侍りしも争ひ名器を空く後空の
青海波の底小流めりきり返上仕りし持来り馬印錦袋入るり取取申りて輪臺
流し系經琵琶と懐く御前小指をひき鎧の袖を顔にお出り良きとせ流きふ
宮とけ有様を御流し聞りて所も御言葉あり香深の清衣の袖を穿て移り柵以
琵琶と兼和二年掃部頭貞敏勅汝家々唐土へ渡りて唐承式小調りて秘曲を傳習
一ふの琵琶渡りし家青山の博士此琵琶を彈りし曲と貞敏小教りし
青山の縁の梢小天人天降りて廻雪は袖を飄と博士瑞相小驚り青山と名を付ぬ
又は琵琶乃造様紫藤の槽小枝の腹花梨木の頭小同天首黃楊乃般首小同撥
白心の覆手小虎皮の撥面落帯之撥面の繪小夏山の碧石の空小有明の月出る様
書りし青山共彌り昔村上天皇御宇小月明朗りて隈り風流をせりて最際
秋更の深夜小降り寂寥する折節御公流清りけり青山をとり萬秋樂の

秘曲を彈ト給ひらる小撥の音ゆめをそとる月もさあ軒端の香ふ天人天降るらん
五六帖の秘曲の時廻雪れ袖を翻一雲井小昇るりわりのふ月出度名器をれ其後凡人
引來は仁和寺宮小傳代々此御所の重寶と成ふなり池大納言頼盛卿も池殿亭小
火を食て鳥相の南赤河川原まで落るる赤旗赤符はらり捨ておれり都帰る上は
八條女院御所仁和寺常盤殿小養子の令兵衛佐頼朝の許より度々申送らるる平家
遠討の院宣下りひる上を其御あうれ幸い驚に居り故池禪尼お通れ難き合致助
られあはせて今ふ甲斐なれせふまきまき其神恩争々忘れなきあはれいふも報恩申
さんと存れり後進まはれ方乃は今を故尼御前のおりゆはと厚く思ひ進まはれを
頼朝のてせふはく朝恩を申替て助をばし鑄師あはれ法皇の仰せの旨も何れ
や申たれしうまはれを憑て落るる又同じ侍上彌平兵衛宗清とて者乃兵衛佐
平治の逆乱小斬るべきは宗清池尼御前の使せしめてその小詞を加く死罪と有る
よみ兵衛佐思ひ多れり國々の兵を上げせぬはれ時池殿の屋原に向く弓矢を
引奉るる又宗清不手とてささるる誠らるる平治不頼朝助とて壽永不頼盛

これら周易不積善の家少の縁慶あり不善の家多の縁殃ありと云々
ふは言人小情故多とて我輩も我輩も思ひなれ

忠度帰自淀謁俊成卿

落行平家の人々或は敷津の浪枕八重の汐路小日成経はく船不棹さんとあり故は遠
を渡ぎ道と分はく駒不鞭うり人もあり途途を出幸定らば生涯闘戦を日小期く
思ひく公々少下り下り中かと薩摩守忠度故郷の家々煙々之より故願く

古郷を焼ぬの原よりかへてみる末を咽乃波多をばり 忠度

依理大夫徑盛

墓おやねを雲井小別れぬ霜りる方とてその内より 徑盛

何の奮女房泣く口むささぬひらる

任まれ都の方よりはねがう袖小涙はらば盛るま川風 古女房

は薄唇守忠度や申い故入道の舎受淀の川尻まで下りてささるる御等六騎相果して
悪で都小帰上りて夜半小五條三位俊成の館小りて門をばらとや叩く内小見成

聞らばもめふ乱の世ありて夜半の幸あれどなく聞えらるる強敵は
ハ良く有りて青侍を出し戸を開きてあそを同く忠度と申者見奉り申へ及事有
て奉りて言はれ三位大庭下世思れ内へ入らるれども門をも細目小園と對面
あり忠度室ひらひの身身として憚あまも助詮門栄花三と都小安堵せし西邊
落下て侍亡び人半疑か一世静と後定く勅撰の沙汰作らるる身八重の夕
後れ多小沈むも藤壺州書末の言葉後入世をも朽ぬ形見不傳り侍りしと思ひ
出て淀の河尻狐川より引返り思ひ上り侍らるる幸頃讀集たに思詠共
侍り身共小波の下に水層をかき幸遺恨不侍らるるを初下進しを並作く勅撰
の時必思召出さよとて巻物一卷後々鏡の引合せり取出し三位感涙を流し
是と後雨津詠一卷願を並作り畢ぬ是永世秀逸の御形見未來歌仙の指南の爲に
念劇中し清青信不願る幸思悦ありれたる世世萬里の浪小隔とも清形見を度
一戸の窓小藏く勅撰の時思ひ出侍りしを宣へ忠度今の身と波の底小沈骨
山野小眺とも思ふ幸かとも馬小騎南濱指て波ありる後成とも後波をおもく遠小

見送であつ世不在に人共おあそ尊厳をも者も多うあき小妻を世の習とく
今門を隔は事の悲しきと哀かほふる涙優かたも減るりせ思ひの神を後
け家代静く後千載集撰れらる小忠度は道を皆狐川より引返され芳志と思
故郷花やつ顯小後人さつとて一着入られり

け浪や志々の都をあれあひむり山接る亦一 忠度

勅撰たれと慈や名字とも憚あまも只首をも合らるる魂いふうりく思ひぬひ

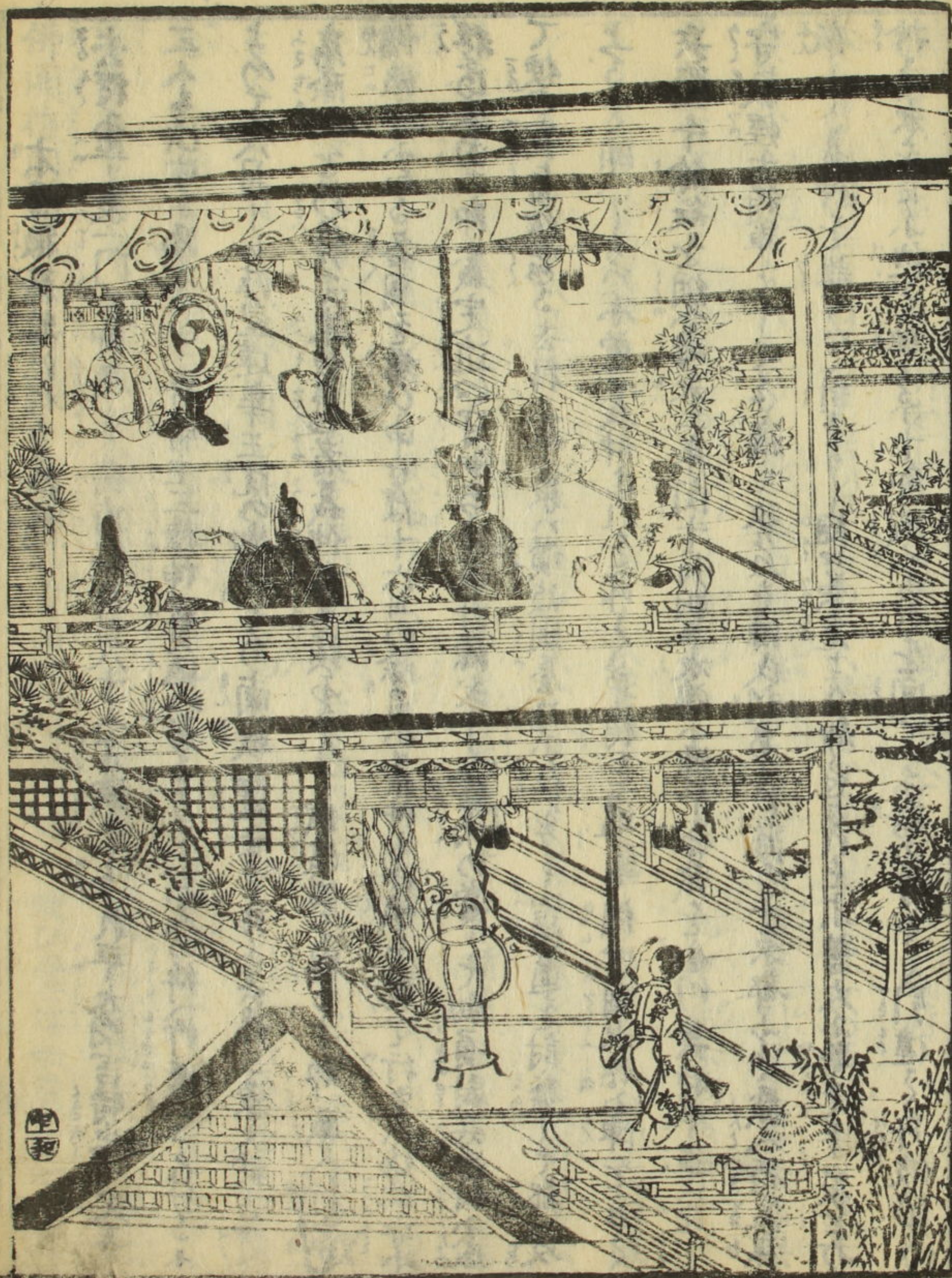
らむ者もさうりて世聞へ

福原公管絃講

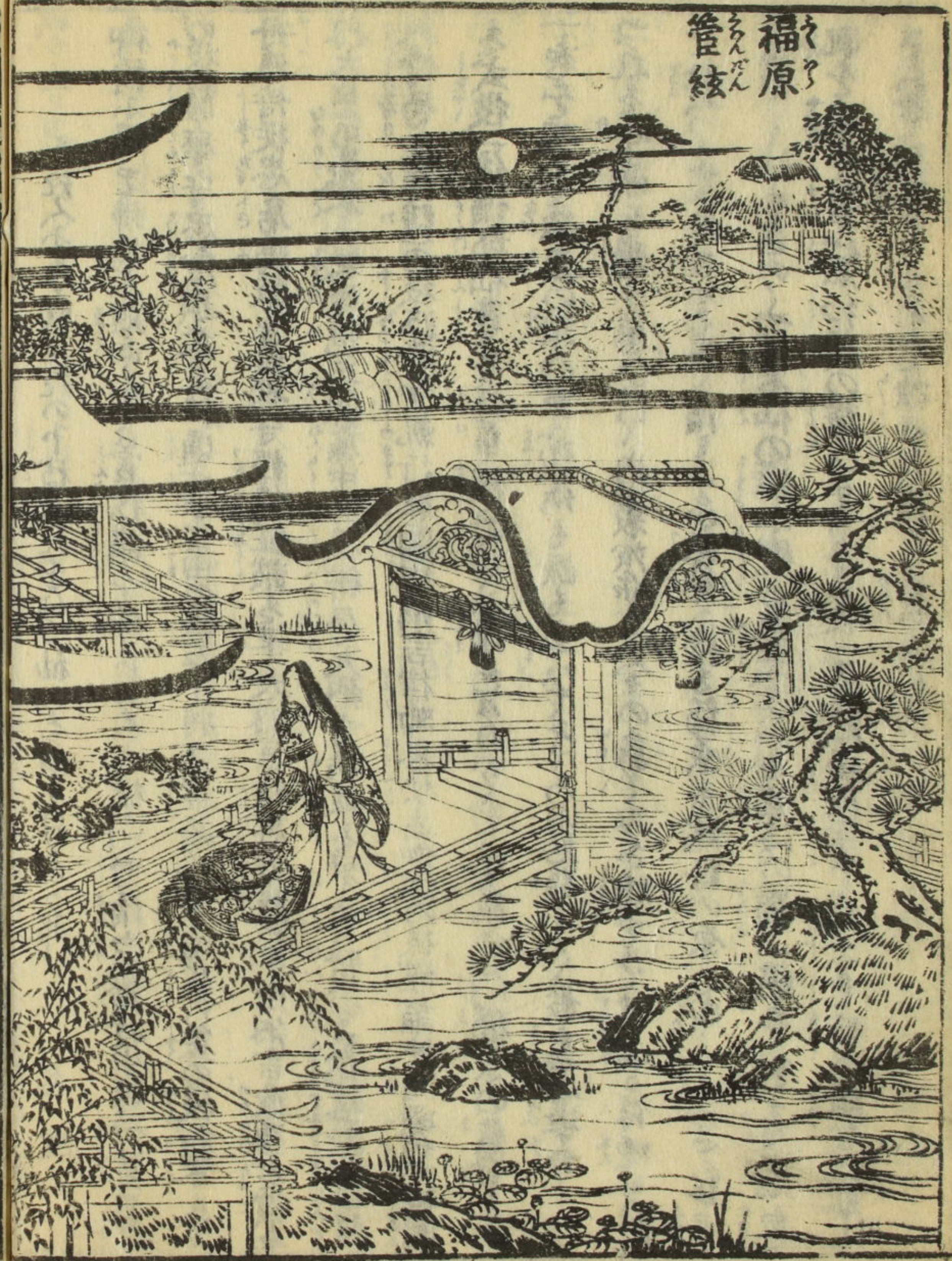
平家を保え小春の花や采りとも壽永の秋の紅葉と散て八條の蓮戸六波羅の蓮
府暴風塵埃之煙雲焔と拂ひけ福原の旧里小下て故相園禪門の墓に詣りて冬
施をなると思ひくのは説言餘所の袂も濡れ小入道の造る法ひ一花見園の御所
月見濱の御所雪見京の宣御所船見濱の浦御所馬場殿二階の後敷後常の位
居の御所や五條大納言邦綱卿の造進しせれ里内裏其外へて家之藤も接り

平家
 一門
 満足
 忠友卿を
 通不執人
 所くの
 名所を
 湯杯奇奴
 よし
 のふ





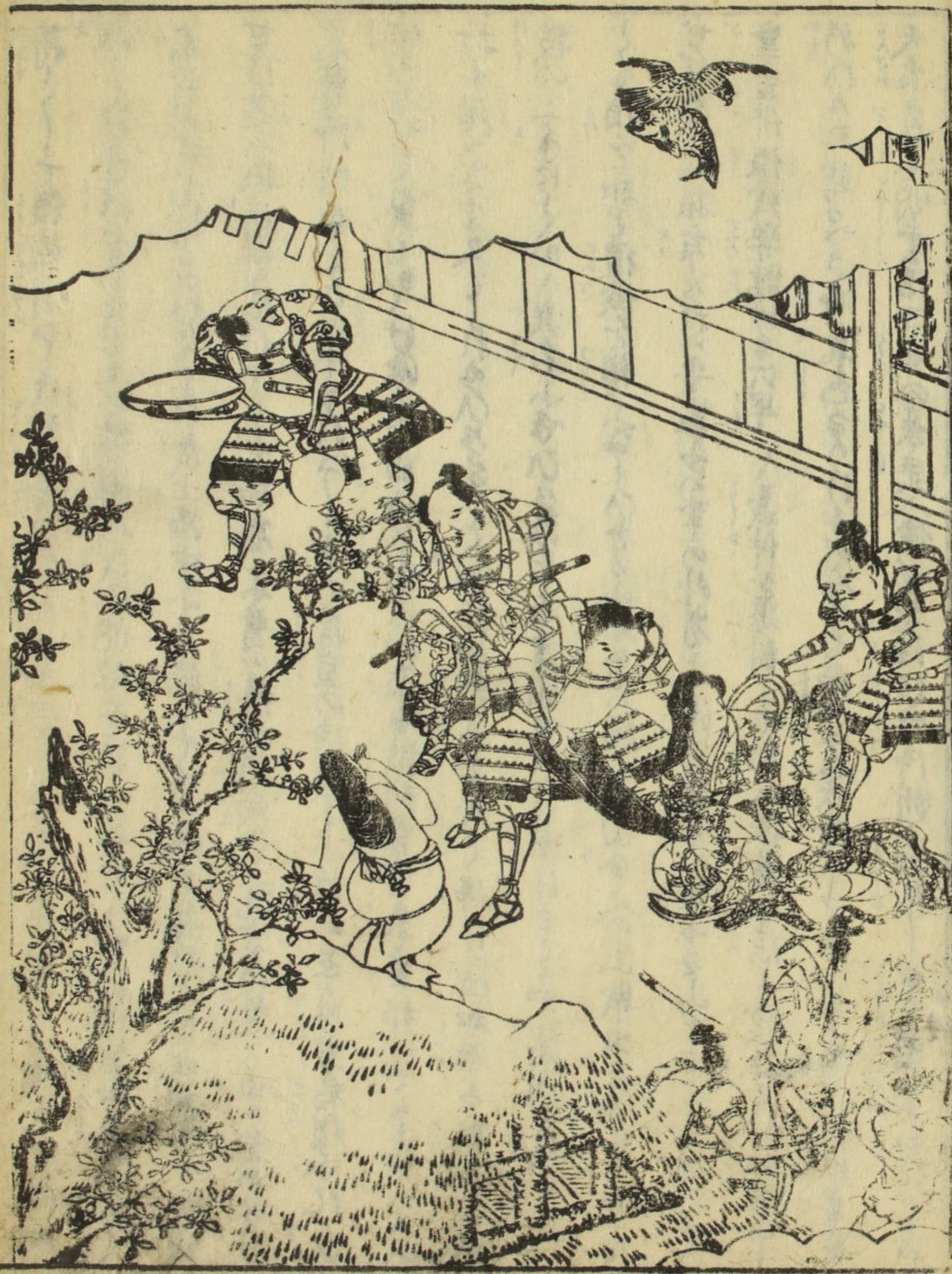
福原
管絃



本曾根藉燒法住寺御所

去得平家一門公卿殿上人衛府諸司百八十人官職を止れ平大納言時忠父子
三人を以中ふ漏り十善帝王三種神寶返へまらり一人の終へ作違ひされけり
よみて八月十日法皇蓮華王院の御所より南殿へ遷幸し終ふ其後三条大納言實
房除目を仍れり本曾根者長仲左馬頭よりて城後園を賜り十郎藏人行家
備後守小ある各園を嫌ひ申度十六日の除目小長仲を伊豫を賜り行家は備後守小
移居安田三郎義定近守せり其外源氏十人軍功の賞にて勅負尉兵衛尉小
て使の宣旨命書も去得平家へ讀は國屋橋小在り山陽道を討廢して都へ攻
上る也聞へり本曾義仲あれを聞て軍將を遣り備中國水嶋小陣をたたく
兵船一千餘艘を滅し壽永二年閏十月朔日水嶋小源平合戦を企り其時平軍は能
守教經大將軍として多痛く攻めを源氏行あり流る小京都より藏人行家謀
殺して長仲を誅せし計りし極に義光より知らせられ本曾大平發して平家と打
捨る表を日小終り馳上る十郎藏人あれを聞て一子騎の勢より引違り丹波流る

播磨下平家を播州室山に引く萬餘騎を遣り十郎藏人を相待りて去り小世の
人本曾義仲世取つたりとほひ平家の方へ弱きを聞かぬ源氏の軍勝利とて
兵小入り悦合せりあれども平家西國へ渡りて後世の驍き小引きて資財難具
東西小運ひし一系白川おも吟なれを引去るものも多し流る小勢も有し
か一本曾立萬餘騎を引率して上洛し武士系中小充満し家小乱入門士白旗
を打まき家小退却し財寶を遺棄し只今吟ると言ふ家小も奪入取けしハ
口を穿して生へき道を通りしものも夜夜と刺し小持府小あかひりも
柳取られ上下安さか形し後様たといふ針を引去るべき大臣公卿の數舎は
さすか怪く狼藉させりかれ平家の代り六波羅の一家と云へり口を穿れをか
むりまで有し小か様小目を見合し食料までを奪取幸いおと公長幸ありと
老るを若くも執さるり加賀國住人井上法師方申行ふより本曾の
悪事成るとぞ聞へり只人民の煩のをも小はる實者八幡橋為祇園の娘で神社
佛園権門高家の清領をも嫌ひ青田原川取て移小鯛の堂塔伽藍を壞り



薪として糧精斜るに始人倫の所為とも覺に遠平家小芳の孫氏と申す
汰しけふは法皇を世上の糧精人民の佗條を欺るる百て壹岐判官和康とて
本曾の所へ作らされたるを或士洛中小元満して資財を掃む人民悲歎して安堵
せは遠平糧精を結むべしと和康本曾が所小行向く院宣の勅を申合めり
本曾許返事を申すに申すにその院宣の所使小橋小冬直雲烏帽子に手
綱をてて髪も切けしめて申すに和康を殺判官也京臺那岐とも申すに小
打も切らさるる又もれ多ひなるかと問はれ判官若共く帰けし和康を死竟取
殺の上子にくわ、異名小好ひはれを本曾聞かしく申けることや遠國の夷とて
とも情を知り禮儀を辨るるひかる小本若の頼るる田舎の山賊中院宣と事た
せは散る小振衆たれ平家小幸の外方と津中發動に後中と山々寺々小丸入て
堂舎併像法弊燒けし早く義仲を遠射して都の糧精と結るる(さき)と和康申
すひはれはつるる清氣色なりけし人も合はれはむしと事定まぬ法皇身
天台座主明雲信正寺の長史八條宮と法任寺清所小招結し延曆園城の勅信爲成

召集め公卿上人も許催あり又諸寺諸山の執行別番小坊兵をめぐれり
義仲と勅勅を著せり一隊聞か中ける平家非道の所ひして君とも芳めなり長
とも流し流り天下騒動して人民安き事をし知ると義仲上流して後連長政攻落し
君の所安小みしなり是希代の忠臣ふあはれ小何の忠意ありてう珠せしはへし
高野東西道塞く京都へ殺殺上ねの御禮とて死せし令と傳へ君を守護せしん
為小兵糧米の料小徳人共が精進する米穀少くも人ふ何の苦事なりき或士は持小馬柄く
して八條ともせめ城とも遠く寺の所はれし料小南田吉長を判小小僧事あり院
所所宮々原の館も多し公卿上人の家もへは兵糧米とてふるる一はら成五系
將騎の勢もつわり兵せう我命と令して君の所大幸小急進せんとて所安小少々
へんく取けんも悪くは上下異なりとて物喰ては傷れ牛馬強しこのも喰物
かたれ道のりばこれ所制すも所安下院強小給ぬへりは推推し申にまは
戦めが終奏せ是也相善く打敷れ下知し後今井四郎義平三百騎中し所所
の東尾坂の方へつるる一子の楠六郎親忠を大将として八條が末に向ひ大花をちして

攻りける天台座主明雲大僧正を馬小めされんとし海舟を楢六郎能引く放り去る
清勝の骨を討ちて直に清勝の親忠が即着座して清勝を取寺門長史八條の宮も根井
小弥を放去りたの清舟の根を討ちて例も治されも清勝を取寺を討ちて清勝を取寺を討ちて清勝
清室もは有振を清後とていふまきと信ある本着あれを見く賊小討きんやまらる
を今井四郎何とて進進白たるも人われを清室のめされ清車之俵めかこへ本着
馬と後て清室といふ所を人といふ義平善く信の中乃王かく貴きんや海舟あふ
しつ本着約の佛や佛をいふの軍あいつふ出のひんかて穴貴くし申て楢六郎を付く
戦場代送出する危りける清室は皇の清船ふたあつたれを清奥あふく南面の門
より清出あつ付楢六郎殿上人も之阻れ教ふ清舟をまかこお打伏せり赤裸小討
とれ清舟あふ赤き極も争へ楢六郎親忠が身小舟中即行細せり者馬より飛りて
清車小後系進く五條の内裏へ清舟の進せり至上を法信寺の池の船の中におり
海舟を表ふへく坊坂殿へ入るる清室其より雨況更り寺あはり
頼朝賜征夷將軍宣旨

去程小兵衛佐頼朝上洛報りてはとく孫倉小居るが征夷大將軍の宣旨下りて

具状云

左辨官下 五畿内 東海 東山 北陸 山陰 山陽 南海 西海 已上 諸國

平頼朝朝臣可令為征夷大將軍事

使 左史生 中原康定 右史生 中原景家

右左大臣藤原朝臣兼實宣奉勅從四位下行前右兵衛權佐原頼朝朝臣可令為

征夷大將軍者恒令承知依 宣行之

壽永二年八月日 左大史小槻宿禰奉

左大辨藤原朝臣 在判し我書下されり

左史生康定は院宣を賜く九月四日関東以下着兵衛佐小院宣をより對面して勅後
の宣を申合め頼朝の返事取寄る同其旨康定上洛に即頼朝の返言を申上る
去頼朝勅命を承りていども賊小朝款を退け兵勇の名長を先祖を繼小傳く事あり
征夷將軍の宣旨下り賜ふ都小居上りね私宅小居るる宣旨を信取せり

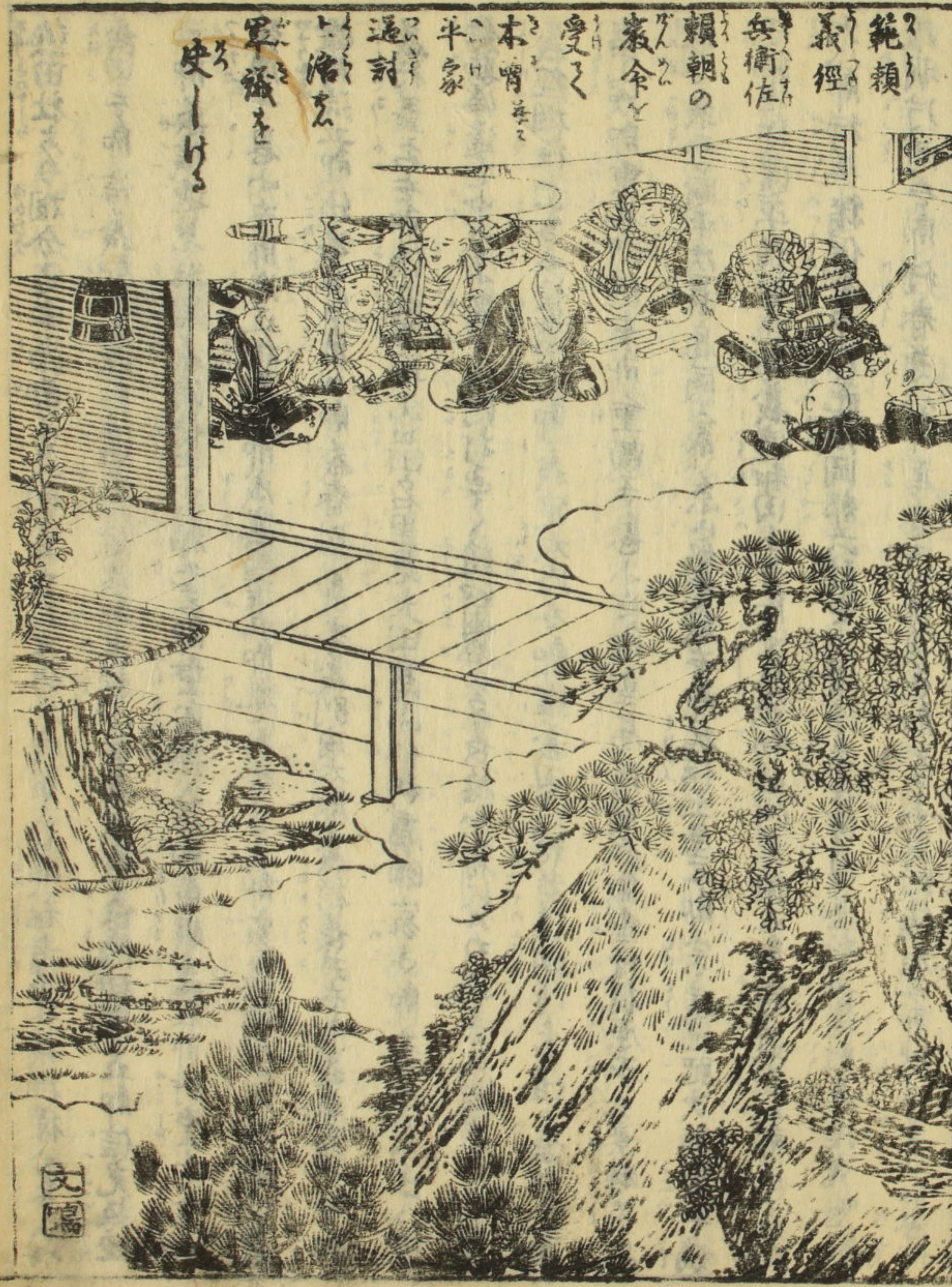
天今其恐あり鶴岡若宮社事は後取らばせし中これ作同康定八後若宮へ去り
作鶴岡也申へ男山石清水を移され四面の廻廊あり造通十條所を股葛とて一も若
二も若三も若南を由井深まで海上渡りて見渡し眺を指し勝れりゆり小京都中
本曾が狼藉益増長し松坂寵愛の沖女美因害とて敷くゆりて女御皇后も
中思ふありて美人の由傳聞し本曾推し許す小成りゆり又沖見公とてかく計ひ
か一進せけるいふ聞へ一減増き半とも人々申れ三條中納言朝方つ下
文官武官諸國の受領都合四十九人官職を止む其内小公卿五人を聞へ一傳
権少僧都范玄法勝寺執行安能も所帯被没官せられた平家八四十二人を解官し
たりし本曾と四十九人の官職を止む平家の悪行少治違せりとせけふ中けり
小平家八雲山が徳二至云の合戦小打揚て本曾追討の爲小西園より攻上り聞
りの義仲と東西小敵を受領せられていひ々甘兵衛佐頼朝に結成中成りされ
今の平家一味して兵衛佐と攻んと思ふ子細を傳はの成事申せしう六大臣
京盛いたふ恨ひ竹葉の甲斐ありて帝運の重く聞ゆさせぬひ再び板兼(河津)

鼓判官類録倉

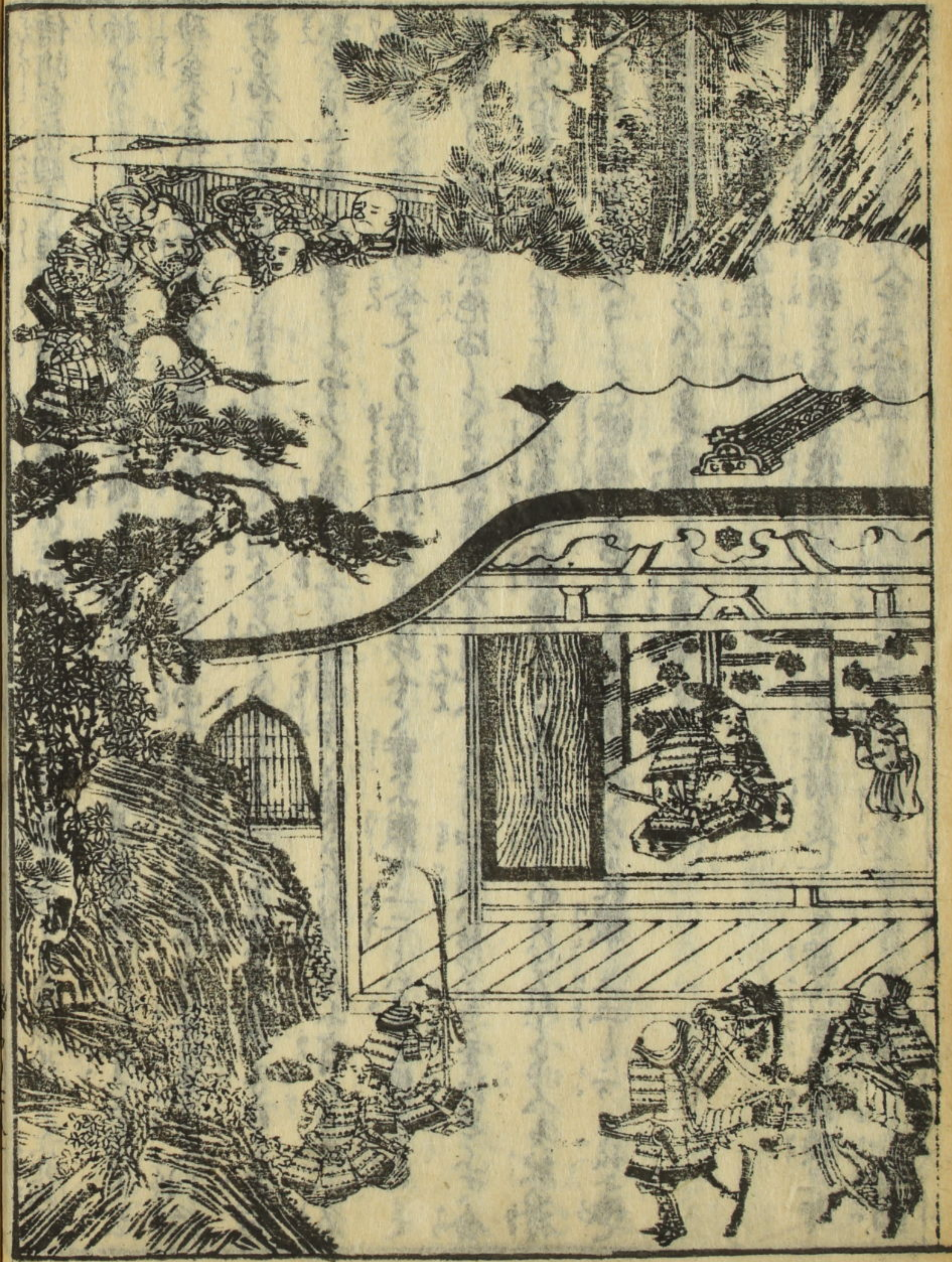
あん事日出なけしせ宣ひけると新中納言京盛計ひ申けるい都小降上人と
候しはれども本曾が為小花洛を攻落され今又義仲と一ふり半然たりて頼朝
知思ひも和りある一弓矢取身の後代も名を惜む形人十名の君かくて清後
あれい曹然取き言と伏し候し小あり帝王を守備しとて一と伝達する一とせ
なト作下とせられいひ候最然る一とて其定小返事せられ本曾を圍く際人と
何事持武士也生くるもと合せ難をかめて故小向人半身の恥家の恥りり若り保平
かとせり士率勢放軍一今更平家小降をさかれば頼朝返聞人事も知り又後代
その人口も面同かして降せりあは来

東國北國の騷擾小より東八箇國の正税官物は三箇年減違か頼朝平家都を
降れり同移八千人の兵士攻上りて綱貢せられける猶家に合身補冠者範頼九郎
曹子義經上洛を中園も京より北面の橋内判官公朝録倉小下省して兵衛佐小
見奉りて本曾狼藉法住寺屋焼てり半香くあれを申れば頼朝大不疑り申るる

絶頼
 義経
 兵衛佐
 頼朝の
 家令と
 受く
 本曾
 半家
 通討
 上治
 軍機を
 使しけり



文
 三



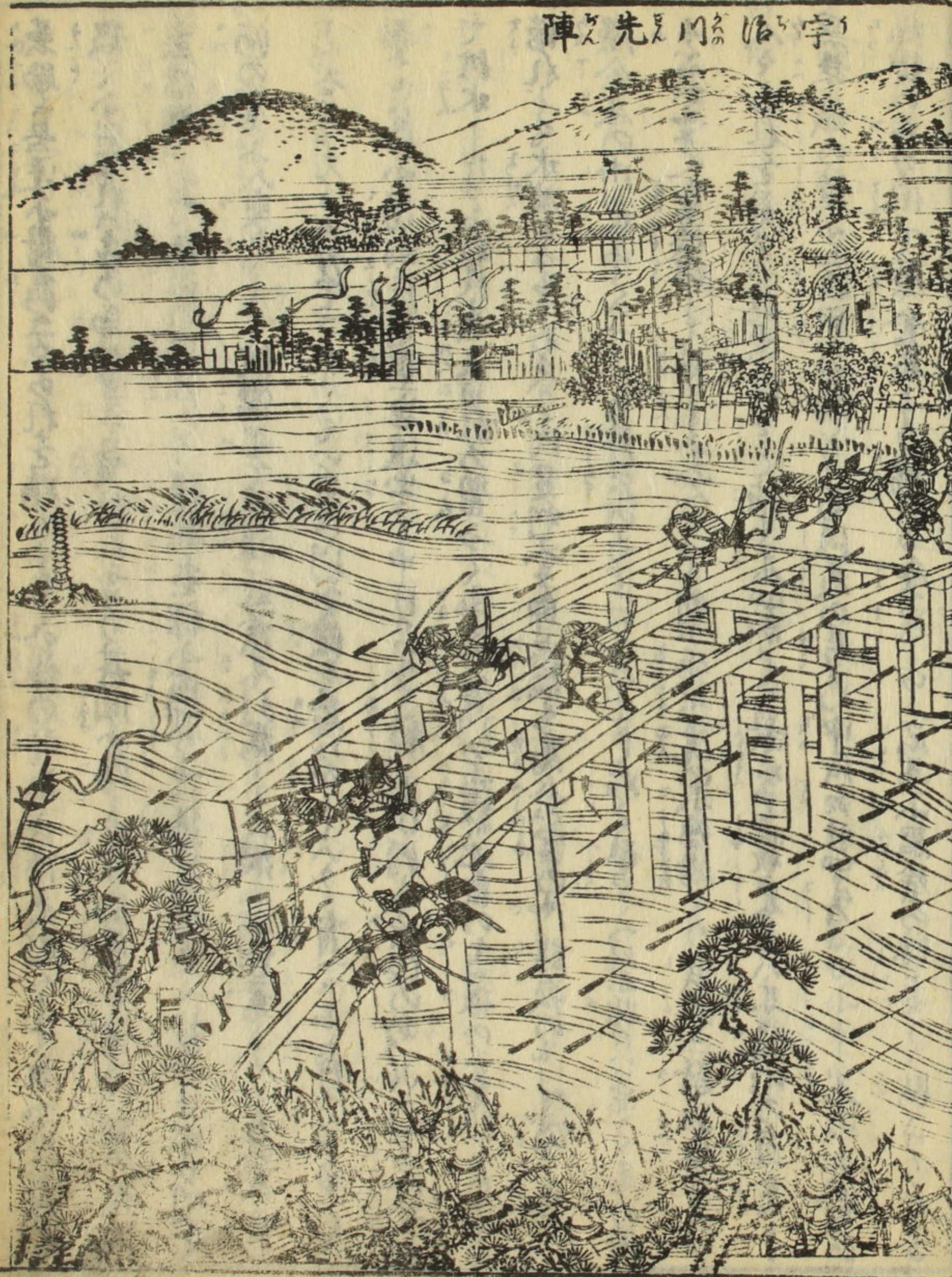
取公をて河端の在家と悉く焼拂ひ大勢次一所不慮む一也下わしは由是殺めて
自一も兼て山林に近居るはれを家々をい人も好しは上の子を不續にと拵て是處の
至家滅焼拂ひの亦も叶はれ老衰切き者共々猛大ふ多く焼死けたるぬく道に出され
とも馬人小船殺する所なく牛馬の群ひの助者をもかけ進む其殺志は七ひはるは
曉を焼拂ふれは三萬五千餘騎も河端小打降り來拵西河の有様を深淵潭とて
巨海の浪不慮ふが好し下流轟々として懸水の隈流れ小舟より虹の橋杵危して所差の
橋杵れをも渡海人半難れれも軍將の下知を有い合々情小舟より身をはるは河川を
産小流ひも名を是後代小流えんとて平山星をりて所不估を本を即定細流を
右馬元重助然谷法帝直實子息小次郎直家以上五人を後て渡りたる夫國も近
成りれは向の岩の軍兵弓矢強く引んが為小慈と甲成腹く思ひく小引れく放る夫は
雨の下く小舟もうられも甲冑をゆり合々夫國をうけひ振るは鐘と重代の重慶を
裏のくまもさるられ慈谷橋杵を渡りんとて子息小次郎と拵く云々は汝を今年
十六歳を極思ふともさねと未堅ゆじ直實小引く流る半船の長は汝は汝の

川を渡りし時勢成力トして海は也也教れを小次郎打釣く林の葉を枝の圓を
せ申幸い侍れ十歳以後の者実の圓すぬ事もあはれ父とは争殺れをさき思ひ
父も我れ小風氣とて眩暈膝の振るとはわれ非は大河に向く細杵を渡りし半老
是れを同是是振ひ流り直家滅燒ひ後申えんと云れれと父を聞くと
は弟小次郎とて親子連て我渡りる流の瀬小舟小舟を度ふ一五人の兵流石
目舞足巻ひて水を逆流れを各弓とはもさけけ輝を流るを野彼小舟の命を
又へ一慈谷を其身の半に去事にくる子息の半のを若く小流うや小次郎傳ふ
くともなれ直家は公をり一流るを流るもあはれ父子の情乃長く小慈谷へ是
とてして其公の思ひありらるるかや

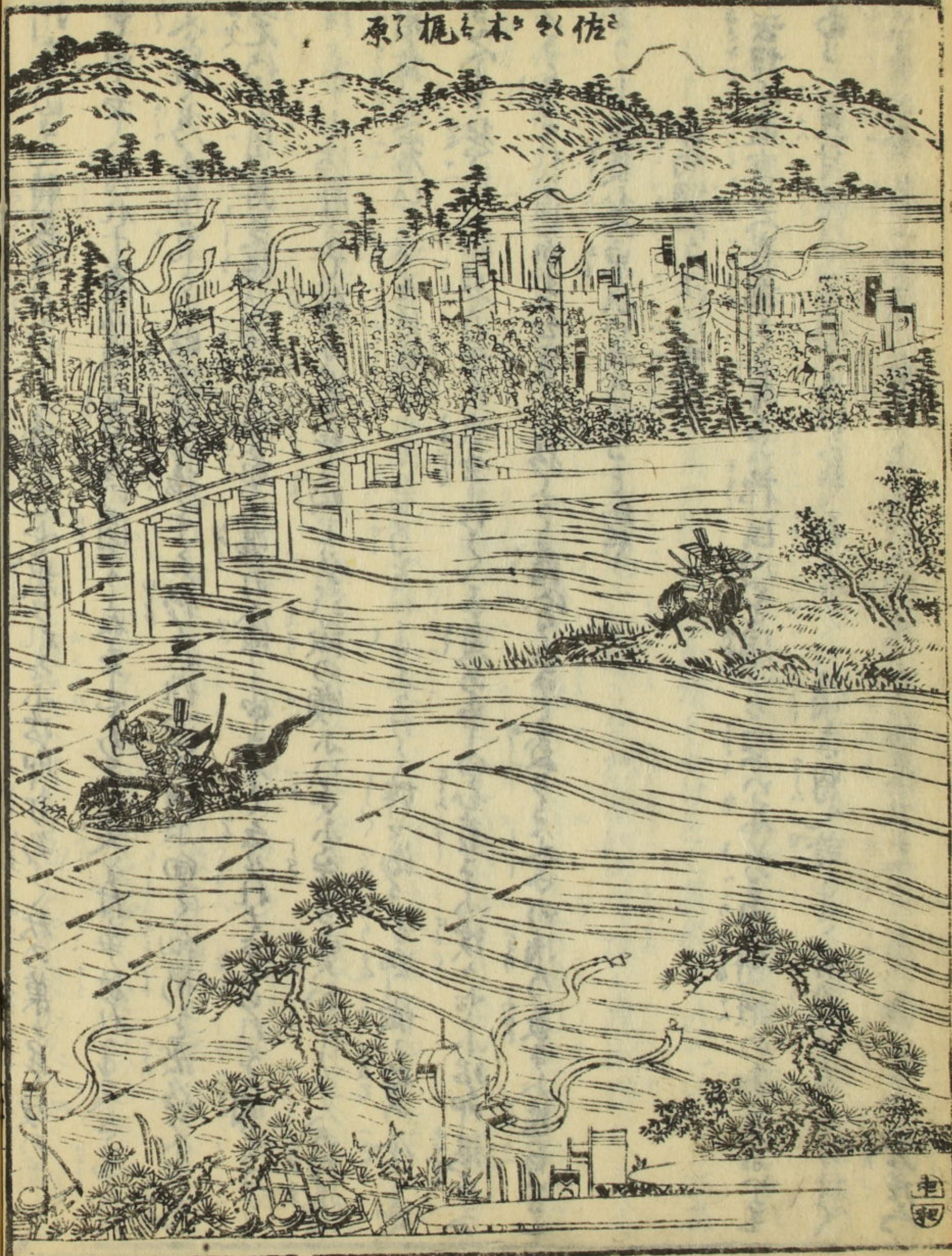
高綱守河川先陣

去程小直實大音揚ぐ云々の拵は河を圍む守の本が及の樹根の初差おたも
あは一旦付はひる人もに我あん令の情を習へ殺さる合致ふ力一と
大軍の命をうさる海の助へして傳小引れく流る小舟を及の船杵を及る

宇治の先陣



佐々木の本拠



高綱の直直小橋を是より返る程小繼打つ虎を看番藤原弓は四馬を石打の
征矢頭高小負噴物造の左り帯てあきも孫倉原より賜る生嚙小美度橋の懸二
て我勝りたる准り先陣を見おし源太綱と打入る遠小先立り高綱をけるいふ
源太及御色せ高綱を外人ふかれいかく申は殿の馬の腹平以外小飛てこむ
は川い大事の波に河中にこ懸踏返して鼓小突れあふと云れいたもあんとあふ
馬を止免澄踏張之上弓の弦を口で喉腹解く引造くしめたる間小高綱
を打込て二股斗先立り源太れをわねせ安の成思て是も打込て流けり馬を
足徳の即そ思移も流され高綱を究竟の遠物馳れを流川岸中い下も剛
と云流うゆして是も流一向の岸迎へ成る馬細小あき足取をせ流けり
約る幸ぬれを左刀被大能小冠三筋細や切流一向の岸打つ澄踏張弓杖空に流本
四郎高綱を流川の先陣流るやせも果ね小提原源たも流流小を流けり
余の早馬と之何は劣り負てせ興り流流を早馬の先立りかいつとあふけり
山あき流の早馬先立り三日と申に馳けり高綱守流川の先陣を申たり同時小提原が

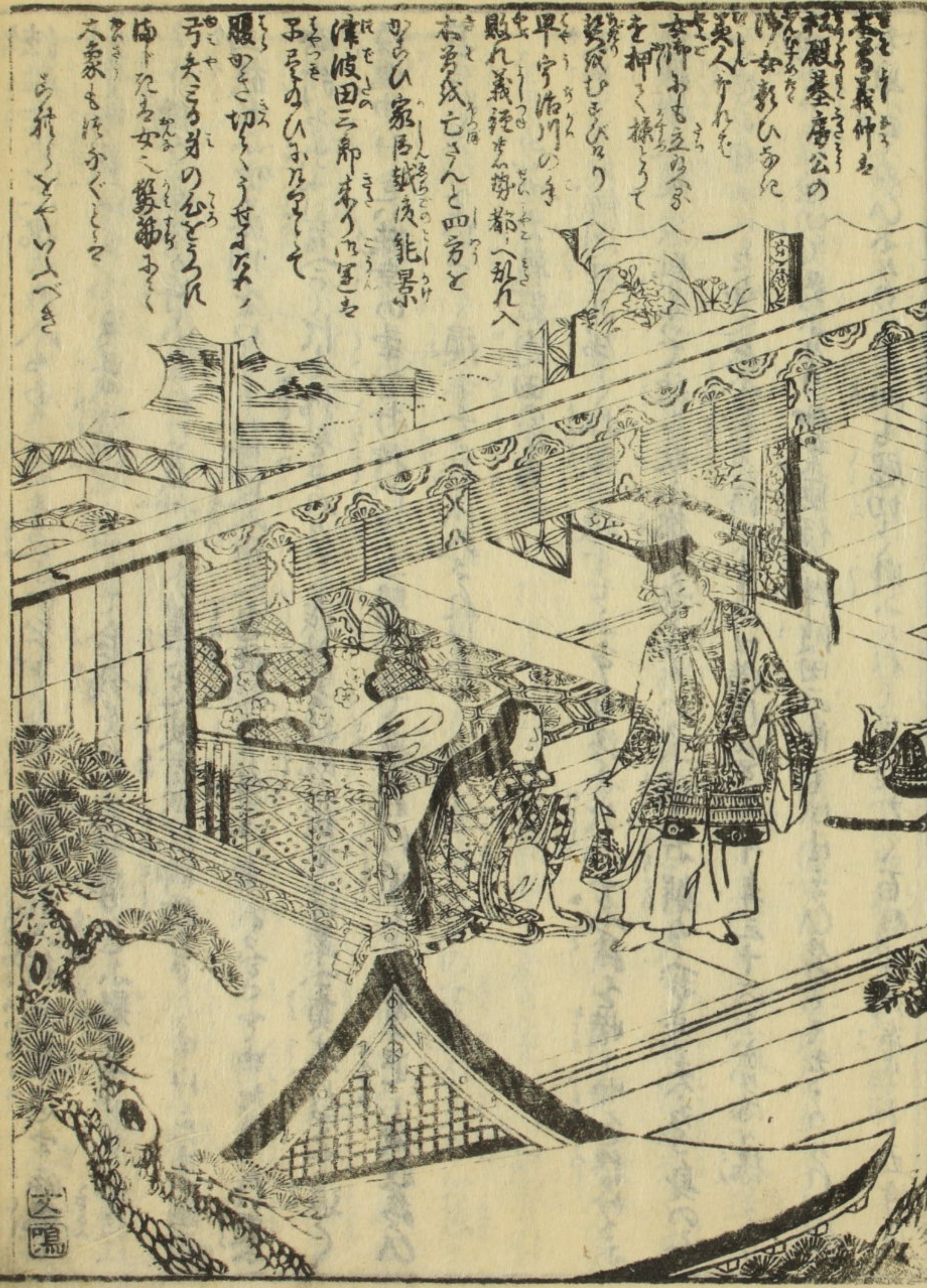
高綱の直直小橋を是より返る程小繼打つ虎を看番藤原弓は四馬を石打の
征矢頭高小負噴物造の左り帯てあきも孫倉原より賜る生嚙小美度橋の懸二
て我勝りたる准り先陣を見おし源太綱と打入る遠小先立り高綱をけるいふ
源太及御色せ高綱を外人ふかれいかく申は殿の馬の腹平以外小飛てこむ
は川い大事の波に河中にこ懸踏返して鼓小突れあふと云れいたもあんとあふ
馬を止免澄踏張之上弓の弦を口で喉腹解く引造くしめたる間小高綱
を打込て二股斗先立り源太れをわねせ安の成思て是も打込て流けり馬を
足徳の即そ思移も流され高綱を究竟の遠物馳れを流川岸中い下も剛
と云流うゆして是も流一向の岸迎へ成る馬細小あき足取をせ流けり
約る幸ぬれを左刀被大能小冠三筋細や切流一向の岸打つ澄踏張弓杖空に流本
四郎高綱を流川の先陣流るやせも果ね小提原源たも流流小を流けり
余の早馬と之何は劣り負てせ興り流流を早馬の先立りかいつとあふけり
山あき流の早馬先立り三日と申に馳けり高綱守流川の先陣を申たり同時小提原が



本曾方宇治の大將
 信濃國住人
 根井大孫太行親
 勇威万人
 勝れ
 血戦して
 軍忠を獲ん

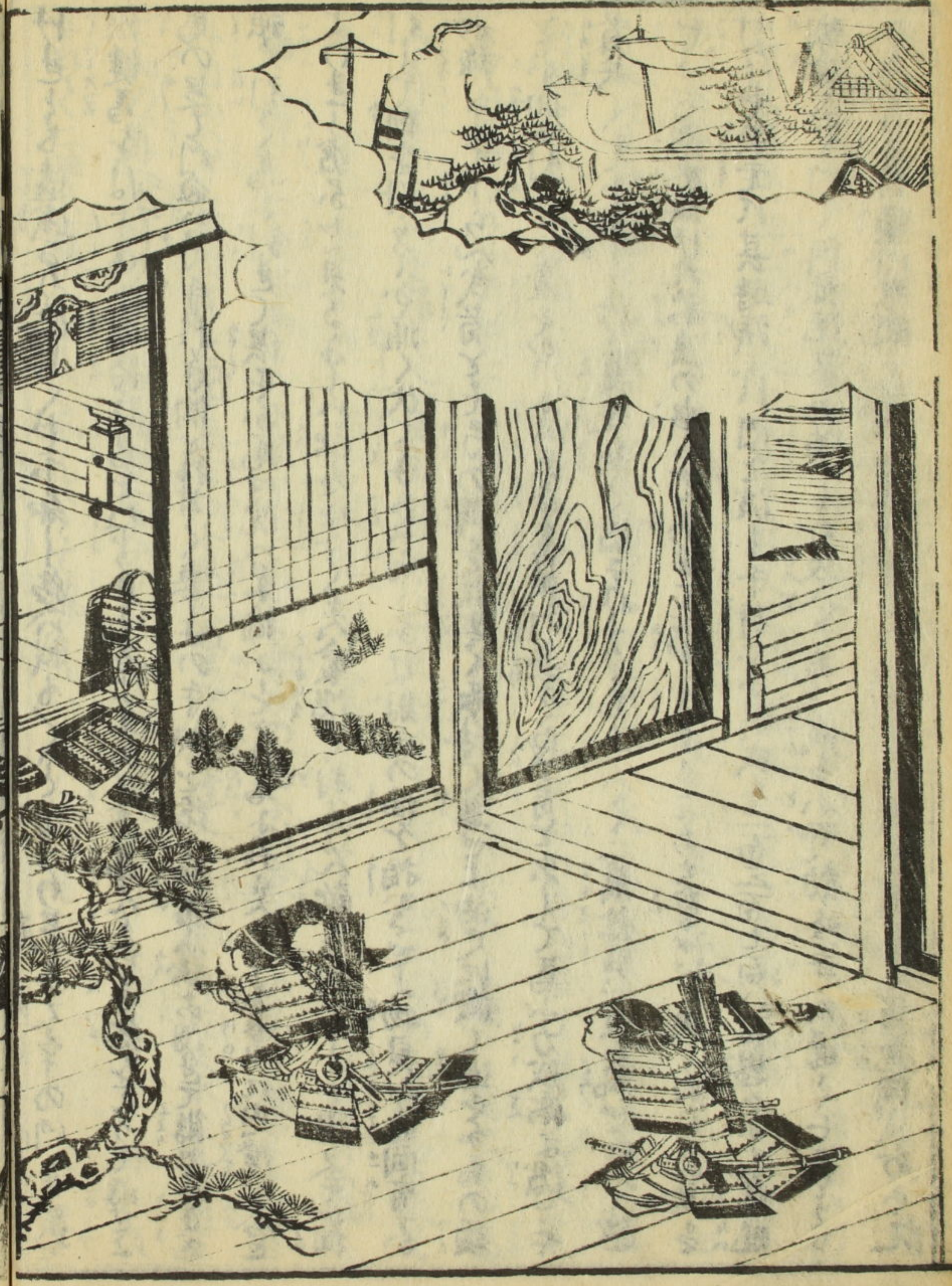
使又著く景季先陣也申けて兵備佐殿い安五利三郎清恒と召て佐々木権原とて同
の共小左作也申け其後尋常ふ事也後日の後進ふ河川の先陣を高綱を獲られり
佐々木権原一陣二陣小波を成てつ終文是利三浦深倉雲も高家も我もこれ後一
波一けてあふ小本方々方より信濃國佐人根井大跡太行敷せよ毒かて預備夜運出
弓杖はる故の陣を見渡一丸郎清曹子能田代辰成あれの大將軍あてきおせり人
行親がらこの時や思ひく十は来成取て番引登て兵せ敵の島が時方鬼栗も多虎
とて射通一々行親一の矢射換して味方の運も早ふなり大情する者一矢と終
ち弓箭の香山を掃を二矢射換して二矢射半あり一故小波の毛見おれ敵先
おとく撥楯の内引退く島山が鬼栗も天馬といふも一も子負ぬれ敵を
痛く弱けし重忠馬より下糸足二たて妻の痛引おく水の底を踏もろろ
外田小早島山は流きぬや見たり小波二なる杖術上く息をは死又水の底を踏り
て向の巻(波)けり小丸郎義経空ひらる今及之將軍より一即等小波陣と波
それく二陣小波人幸然とて下りて橋より引下く橋小波の馬をさくあふ小水早

けきとも遠浅きり波せくせ下知一終我もくと進なり是と大幸の河へ馬依と
細健馬をば上小波詰さ馬と下小波よ馬の足乃届人とい手怨をくりて遊せよ
馬の足乃ぬい弓手れ子綱と指甘く妻の手綱を絡し四層小波あ回きて遊せよ手怨
強く引く馬小波引きて渡さ尾は沈へ茶輪小波が馬小波突さす常に肉撥と合せ
よいさし波系や見たりゆい敵と定く矢喰化く射人敵と射ふとを射さす相
引して鞠を射らる痛く伏て子愛射ふは射向の袖を指させよ物具小波回育ふ
水強くして下ら(武者)とをらの弾を指さく取付て遊せよ曲尺に波て過る馬の頭
と水面小波引さく童まのり小弓の本苦波打おく曳首と出して馬小波波よ波せや
者共くせ下知一は真先急く波されり是ふよと二萬餘騎一故小波也打て波
けき漏水無けれ波後の水も流し何きを流し流しなわち勢河を波ぬれと敵も
叶りせ取走に其時強げ河を渡一千騎二小野或三百二百七百八百思ふ小本波脱
蹴踏ふのり阿弥陀峯の華々攻入をあり或も小野勸修寺城通く七条より
入もりの威植川城波本幡山深州里より入をあり或も伏見尾山月見岡城おふえ



本番長仲を
 初殿基唐公の
 御女影ひあは
 英人かたを
 女御もまのま
 を押く様うて
 長成ひまひなり
 早守治河の手
 殿れ義経を勢都へ入れ入
 本番成亡うんと四方と
 のりい家居城夜能景
 津波田三郎ありはまを
 子母のひふなりとて
 腹切と切くうせまな
 弓矢三郎の公とら凡
 怖れたる女に勢都あは
 大衆もほかぐとて
 ち行くとやいへき

文鳴

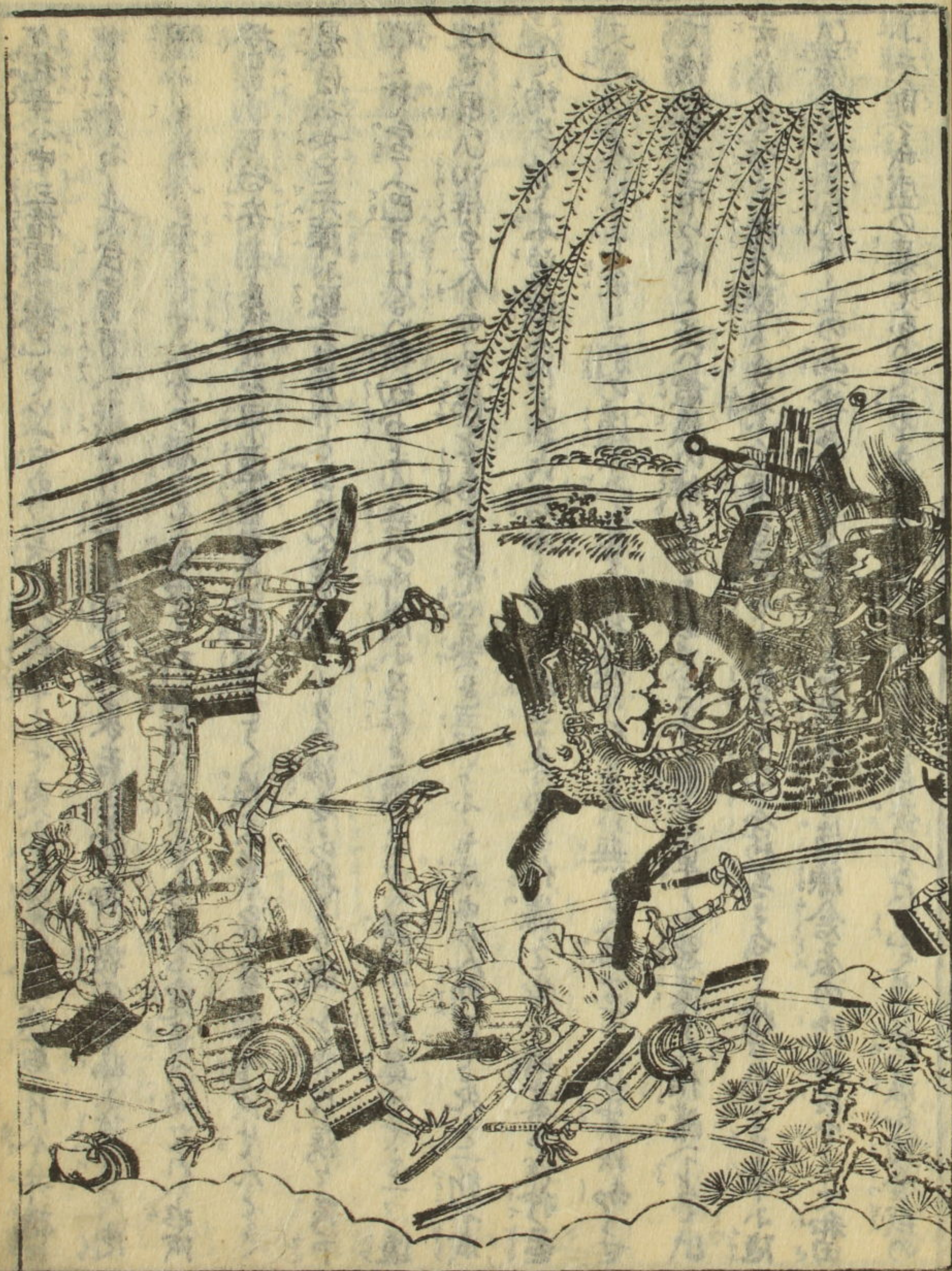


法性寺の二搦り入りも道と互ふれども同ト都下乱入行親親忠之伴橋を
引く防戦とてとも義経河を渡りて合戦せられ本曾勢忽小敗して四方小勢散
り使を本曾が俘ふされ義仲大奮て先使者院御所へ申けり東園乃
出族已小う流川をわたり都攻入作之急醍醐寺急津幸あふと申たりこれ更
御所を出沖有命と作をされり義仲と敵既小伏見深草責本れて中退く
径進由けり陳幸の幸と打控門下小騎馬して飛出は皇と本曾が退り流河の
其後之をわたり預して兵依へされけり

巴女力戦敵内回家吉

本曾立條内裡母帰く松殿の娘十七ふりせ給ふ矢ふ名張を惜し時を待たず
越後中大能京馳来て敵と敵小都小丸入りいふ岡小打解め我方夫なる身のを
を待たずゆりれと如く只今私見路の幸の口惜しよとて今年二十六小成り居る揚上り
飛下り腹挫切て矢ふり加賀國後人津波田三郎もはゆさひられも出たりは御運
も早そのひふりりと此も腹切り降ふられも是れ北なく百騎斗成率一と五傳成

東へ浦小流を筋遠ふ六条河東出され根井仍親橋六郎親忠等公百騎騎少く本曾
に仍進ひ主従の勢二百騎七條河原法性寺柳原派見渡せば東軍隊を率く其
本曾義仲中乃流合戦今日限り身とも顧み合ふも惜まらんといふあはく落し
戦場小降人々逃走りて東兵小笑とる及代の和なくあやせられ行親親忠老く死
まら兵の懐かき其恩欲喰く其死を去まらば又兵のほくとりふ小原九郎義経は
を見く二百騎騎殆どを敵両方相分せり四方へ散れ衆先を細く射られ
義仲軍忽敗せり六條より西を指し馳走る本曾軍將三軍の方圍を立今合戦と
敵今といとも義経又必勝の術を廻り強大の兵を退り義仲左右の眉の上を射られ
矢二筋拍多く院市所へ帰来しける小將成経門を閉り標成指され再二拍相
所小九郎義経梶原景時流谷重國佐々本高綱等十一騎鞭を打て響を並へ去り
搦え敵射られ義仲泣けりて落しり義経の軍勢北と退り攻まら其間小義経
院番しては皇と守備は義仲とありこみ打敷れ東河うて落しり西宮河東と
見のひ僅小七騎残りたり本曾も流河小今井根井樋口捕とて四五王也聞えり外小義経



が乳母小中三権頭を娘巴やと女あり一方の大將軍にて更小不覺の名取なり今井兼光
を兄弟ありて武勇万人敵なり巴は肉田三郎家吉とて押入鞍の茶湯小攻付く肉
甲小守入きく七すふかの腰刀を抜き引込のけ首を斬り刀も究竟の極なり水攻
拵もも安義仲を早運せぬ我討まう後本曾宗義相合成生人とも
最後小女と先陣小助をせたりと云わん義肥りくれ海をよれり賊をせは疾く下
れとせ空巴かけの我切あう君の陣内小呂は進せし野末の奥にそり道
にぞ思ひ切侍を今の家信をよき心憂を君いふも成ぬり人斬りて死を二物不成
んと殉死を本曾成小はあまの思ひあうも我去年の妻信濃を中一時妻子泣捨せ
又再び見ゆして永く別の道へ入る事あはれぬ無らん縁までいふ半成あうせ
て後の世を弔りやと云ふ最後の件よりも然又とせなると早く思慮く信濃下りけ
り様をん小指れ故もあましく見ゆ早とせ空と巴名取をさる惜れれと主命小池
ひ落し涙を松は上の山をさびる粟津の合戦終る後鎌倉殿の御侍はせし七和
小を即義盛の妻やありて男子成すむ朝比奈三郎義秀とは是なり其後和田合戦の

騎朝比奈討まう後巴は泣く誠中小紙(出家)して巴尼也成佛小花香をとり主親朝比奈
と書提を吊ひ九十一歳まで保く藤原日出夜して終を取れたる也

本曾義仲於粟津原戦死

源範頼の勢多のよれ大將軍たりたりも権を引りり源一清もさる様ありり頼朝
三郎重成榛谷四所重朝成先陣りて田上の供市頼を渡けり石山通小攻今井兼光
兼平五百騎めく園分寺の毘沙門堂小陣を取たりはる互小防さ残たり方等三郎先
生義弘ありて討まぬ東軍二萬餘騎の兵雲霞のてくなれを防難ありし今井兼光
兼平も戦れり軍兵都(入)りて園へなれ兼平も弱く覺る本曾及北園越ありしひ
れを綱の西の浦を三百騎騎まき北へ向く歩り義仲を園山開寺打まき東軍捕りぬ
小栗津原打出渡りぬ舎ぬ本曾之ける都ありいふを成たりはる今一及兼小相
見んと多く敵小後を見せ是きてあれりと絶て涙を流す今井も勢多ありいふも成
なく惟へとも向後客侍りあれゆで遁走参り義仲兼平に馬を双て空なる河原
合戦小高梨仁科根井も討れぬ身も己小疵を被り心腹れ力盡く進退あとりし

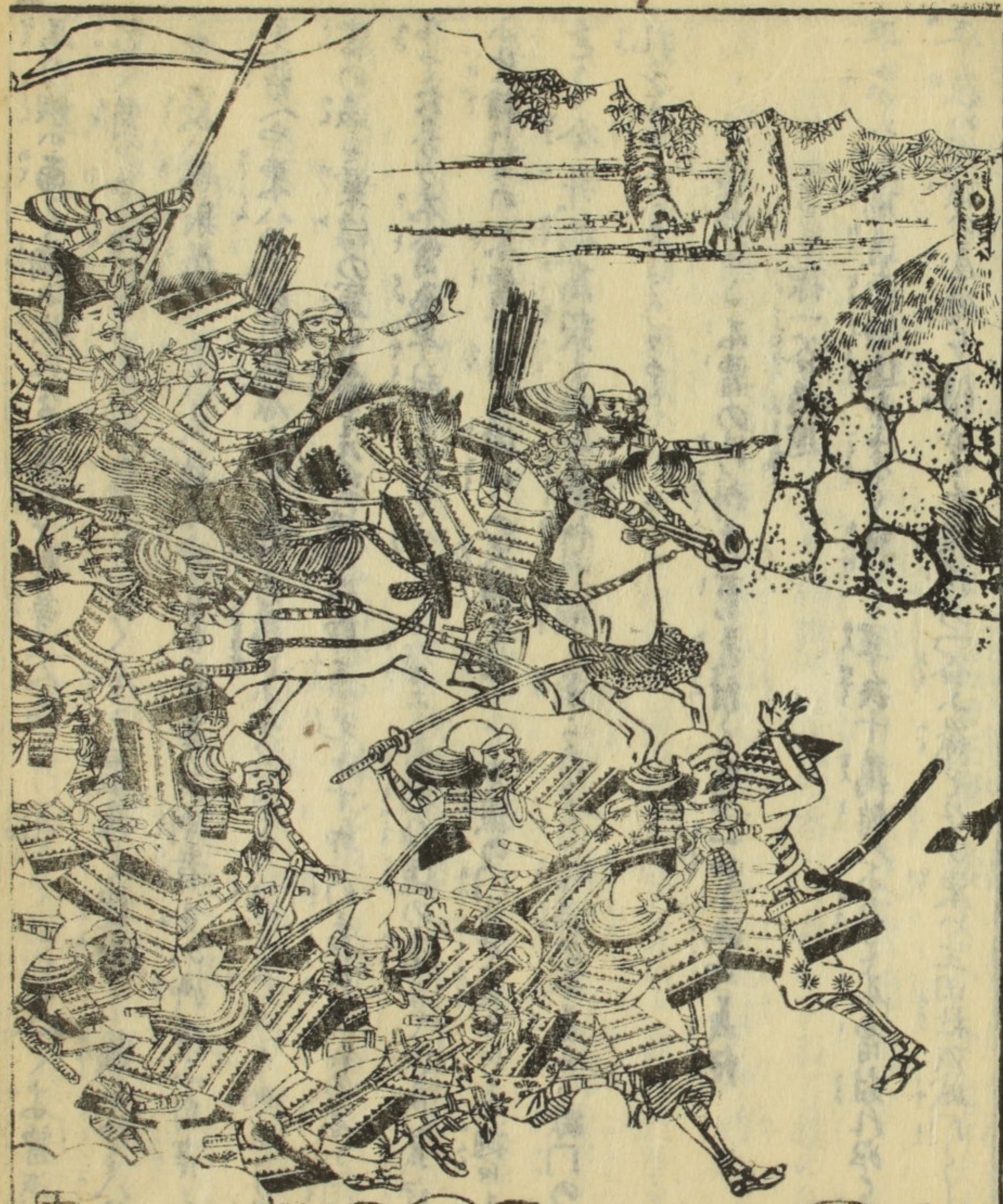


栗津の合戦



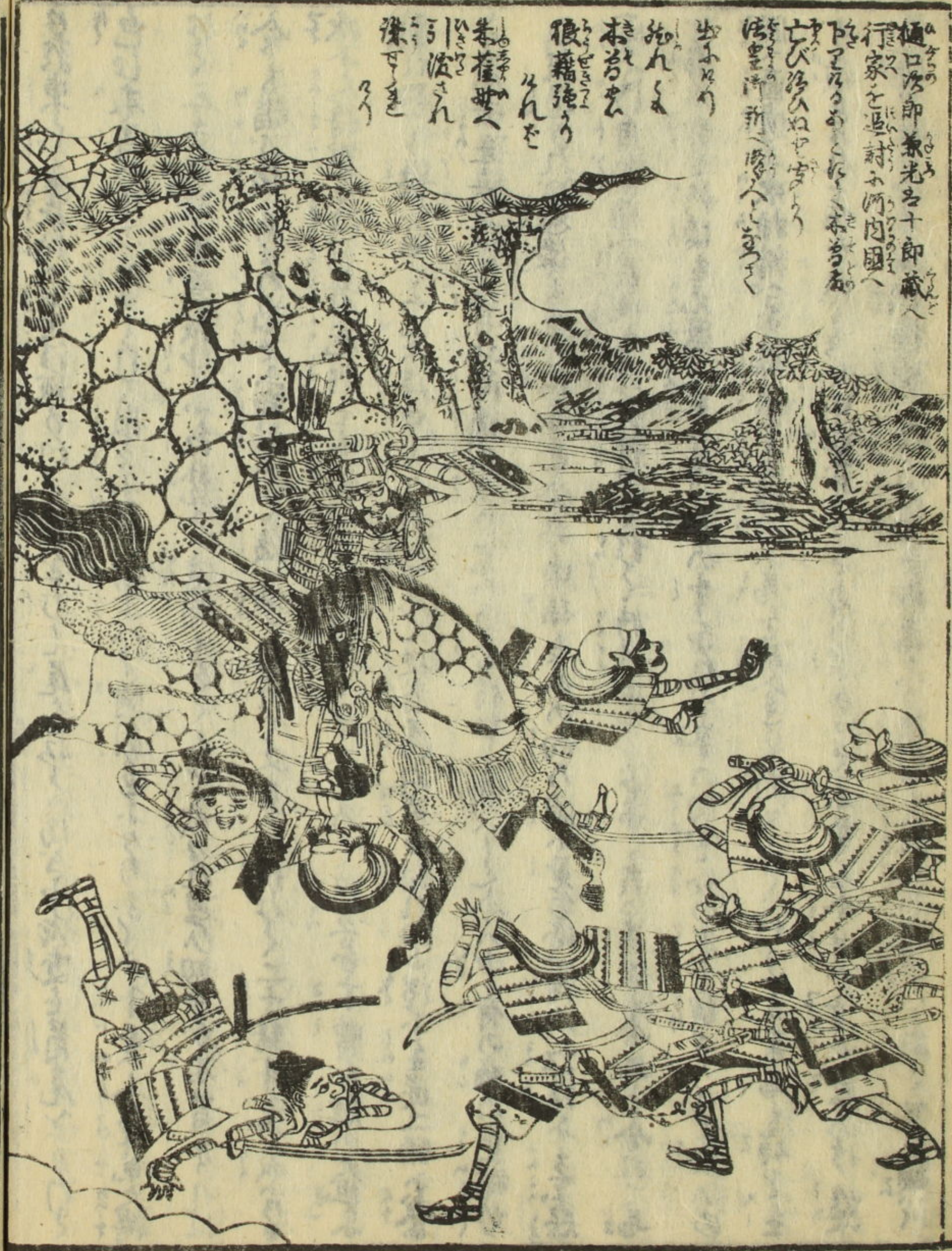
首級放の為小海らう幸名將の馳之軍駐れ自殺さる猛將の法之りたる兼平善て勇
士之命せは飢死を被て居る置將之難成遁れく勝と亦ひ此を去て辱成さる
然中平氏西海不在將軍北別入る天下二分して海内殺れせんを時天運小東
義兵を揚發する意く誠本國有まて通れぬ兼平あて敵を相防へてやとて旗を
揚され勢多る落する者難成是く二十騎二十騎展され四五百騎小及て兼平力と
將左右を顧く者恩を報いて今成程人半此時小育防矢射く落地一されと力
を五百騎騎の信心とてやとて西の中を後小東の法を亦得く夫若成なる小東
軍七百騎攻まて國成後又後小東を甲斐源氏一條江郎忠頼板垣三郎兼信七千騎
はく先陣小進し粟津渡小打せり本曾赤池浦直垂に落金やつ小曾若く射せ
て瀧田を尾の矢射て名東は落し兼平小十代後胤六條判官為義の孫帶力先生
義賢次男左馬頭兼伊保守今を朝日將軍源義仲生年三十七甲斐の一條也也の備
用之難人の小おけんより細細とく書をぬく蹴踏より一條江郎も伊保守義三男
新羅三郎義光の孫武田を即信義三嫡子と本曾と一條也兼信三郎の孫を也と

は東兵を長蛇の軍法派のりく頭を打ち尾を以て防ぎ中派を首尾とのり
色じ本曾の中小おけんれて敵小致へ早八十騎討せたりあり中千葉今伊胤大將
はく二子孫騎本曾派中おれ統く透間もかくも成致され思ひ切る本曾なれば
合も惜は振るりの散る小敵破りく後一通て見れも又多く討む二十騎斗表成らる
次小大將軍蒲羅若花七子孫騎也本曾派中おめて攻ま本曾を敵の大軍小
圍れぬとて一粟津原より引退さく從者あぬ或を討れぬ得るも二騎小成
あ来去年六月本曾北陸道派上りあ五香竹縣と聞へ今中府の嶺の空獨り
る道送され想像もせぬ今井申様とあに向乃岡小身首一付乃松尾小多志
岡小沙自害也其間を降矢はすて好く沙信申へ申上れ本曾と今井と分れて馬
と騎小あせり頃を元暦元年正月廿の事おれを峯の向雪谷の氷も解さるる向ひの
岡直達小氷柱結る孫原と深田小馬を馳入る打もく仍る兼馬も騎も
も敵をたれをれともく甲斐成る身果あり本曾を今井や後中思ひは後へ
見返るなりけり城相模國の役人石田を即為久が孫引く放矢小肉甲と射せて續成



文陽

樋口清兼光十郎藏
 行家之退討不河内國へ
 下りてあつたては、本意を
 亡くすべしとて、
 信濃新へ移入し、まゝ
 出たり
 ぬれぬ
 おかき
 狼藉地なり
 朱權之
 引渡さん
 殊可き



馬の頭小高く備小伏に身を為久々即等二人馬より死下を深固小く本曾派引落し
びく首を我に小りる今井の勢をきく今七最後中観念し龍小沙の八筋の夫
あて敵八騎射落しをり派被く申りる今八幸の剛者主の伴小自書さるや電
變習や東八箇圍の殿原こそ左刀の落小く馬より逆小死小りる兼平自
害の後に葉津の軍も無き今東樋は即兼光と十郎の義経追討の為小河内國に
下りたるが本曾後早討せぬをまじく上洛さる相作通の色也九郎義経の軍兵
小生捕れり本曾首を流中の天羅を流して左獄の門也也あけを樋にも共小斬
きり今井楯高梨も共小義仲や同くあられり何者の不為あ獄門の木の下に
れを書きくまじくつりり

信濃ある本曾の所料も著書討つた一に小九郎義経

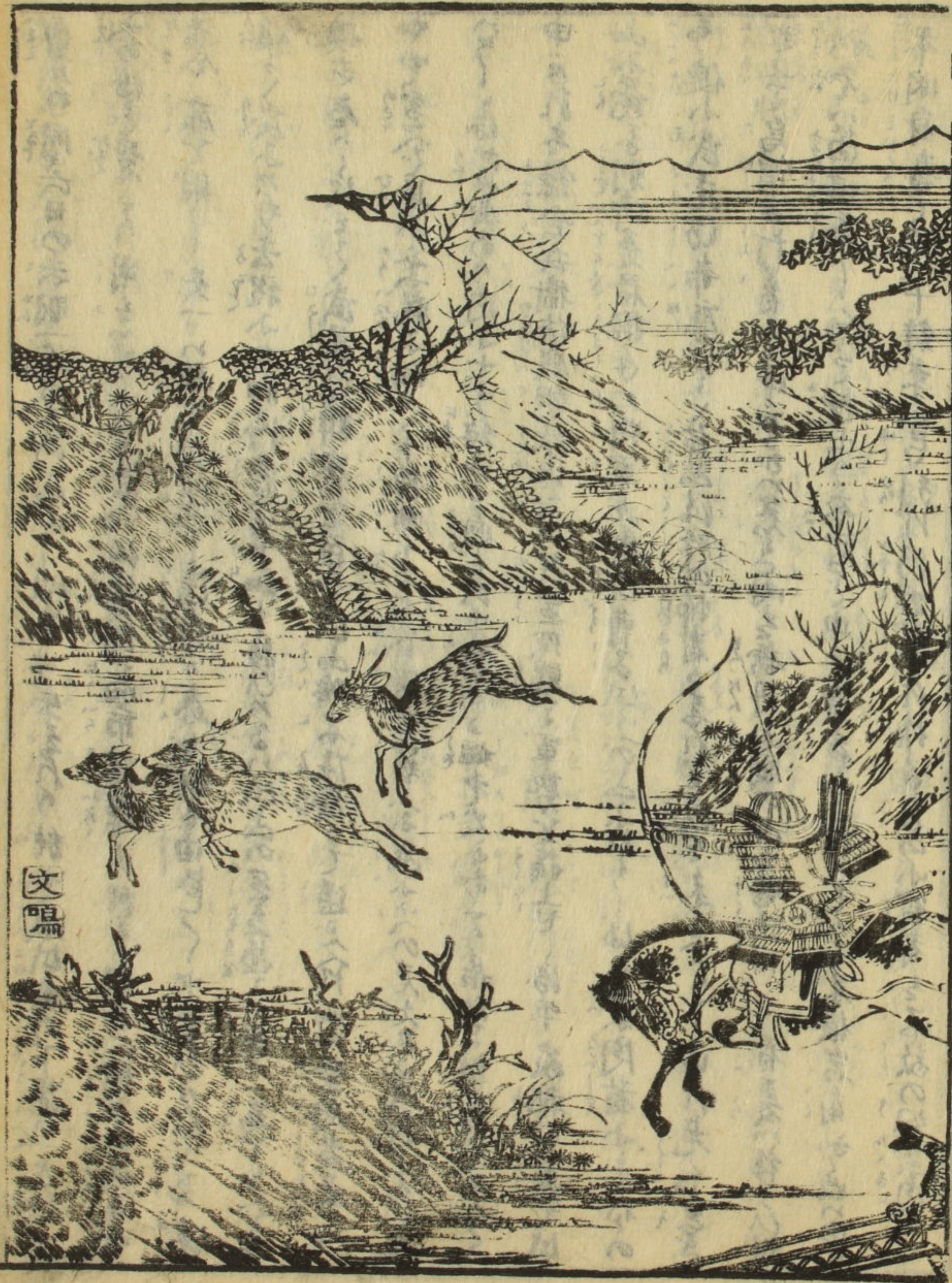
龍尾標一谷勢越

平家と山陽通南國道をまじく籠く軍兵十萬餘人及び本曾討れぬ頃
平家い僕使の屋嶋を傳中して根津の二谷小流りる東に生田社城門く西に二谷
根津の院城門也其間三里須磨板宿和国兵庫と續り小を神海俣伏待將
小連りて魏々たる險難あり南に瀬海津々として汀を人馬の通ふ際あり身も
中城を奪還成本派引二重四重小櫓城揚地楯板楯たり海上に去敵万艘の兵
浦之嶋々小充滿り其頃法皇一條鳥丸の所所少く平氏追討の所初あり九郎義
経を院所宮て我朝の神靈二柱の神器京都へ還入せられ仍舎れり義経畏
ていそ安あ小住こして居たり法皇御氣に思召れり生田の退きあ大將
軍の蒲冠者範頼梶子の大將軍九郎義経丹波被小あして松原國三草小向小
平家の大將軍小新三位中將資盛方中將有盛備中守作盛副將五平内兵衛
清家江見を即清平次初し一七子勢勢少く陣をたふ九郎義経は六夜討せよ
三三一萬騎ゆく三草山を城西の邊へ打り平家の明日の軍さく甲成腹に小籠を
枕りて打守りく本後もたは後より名を義経赤巻と唱く例の六續れ用意せ
たやや室小即道の家々小人をあられり六福天小掃地を照りたれ山中のあれ小
勢り平家取れも取れは得武者ゆく逆走り保成之軍の手始小門出じ



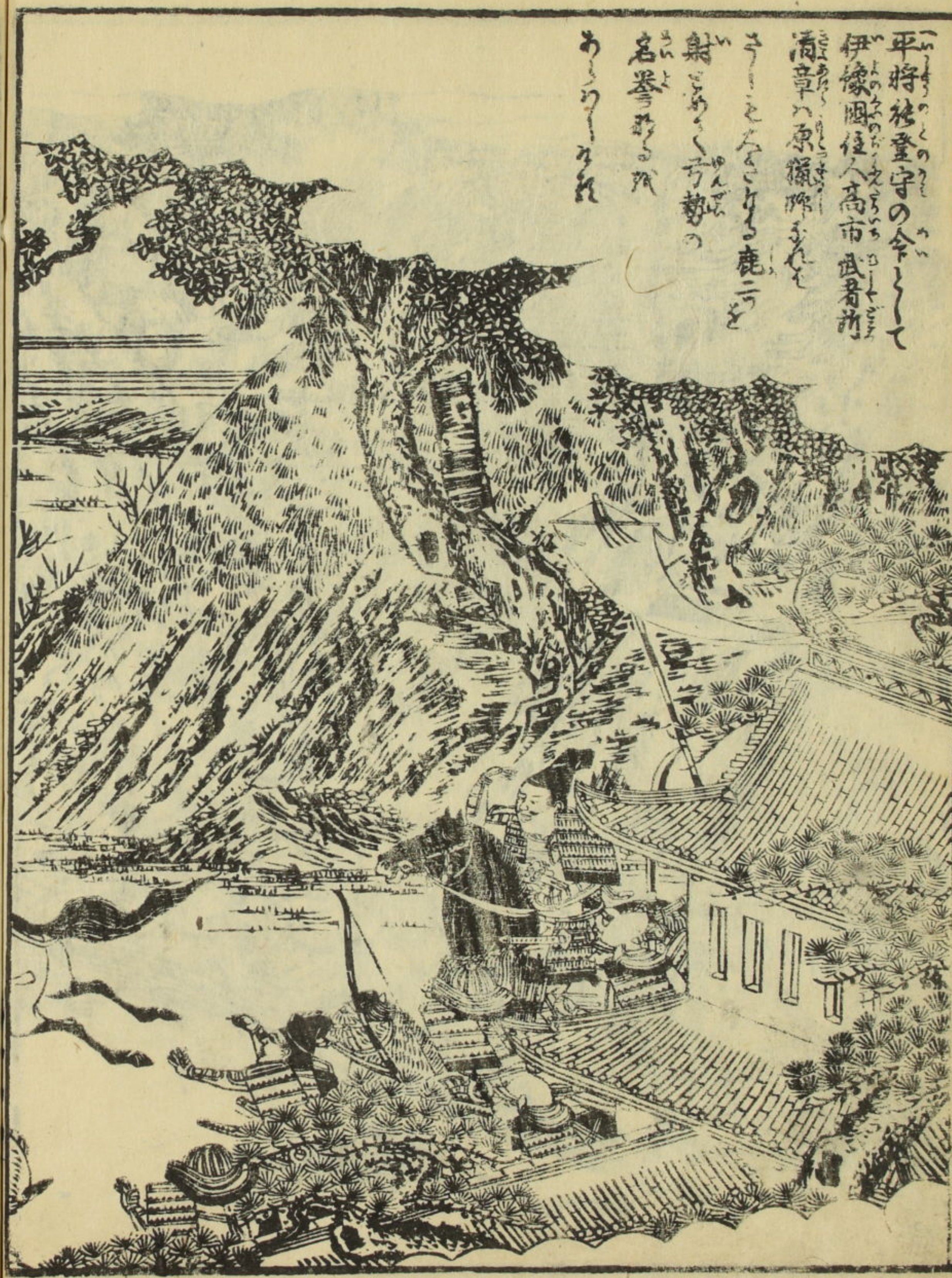
三草山
合戦





文陽

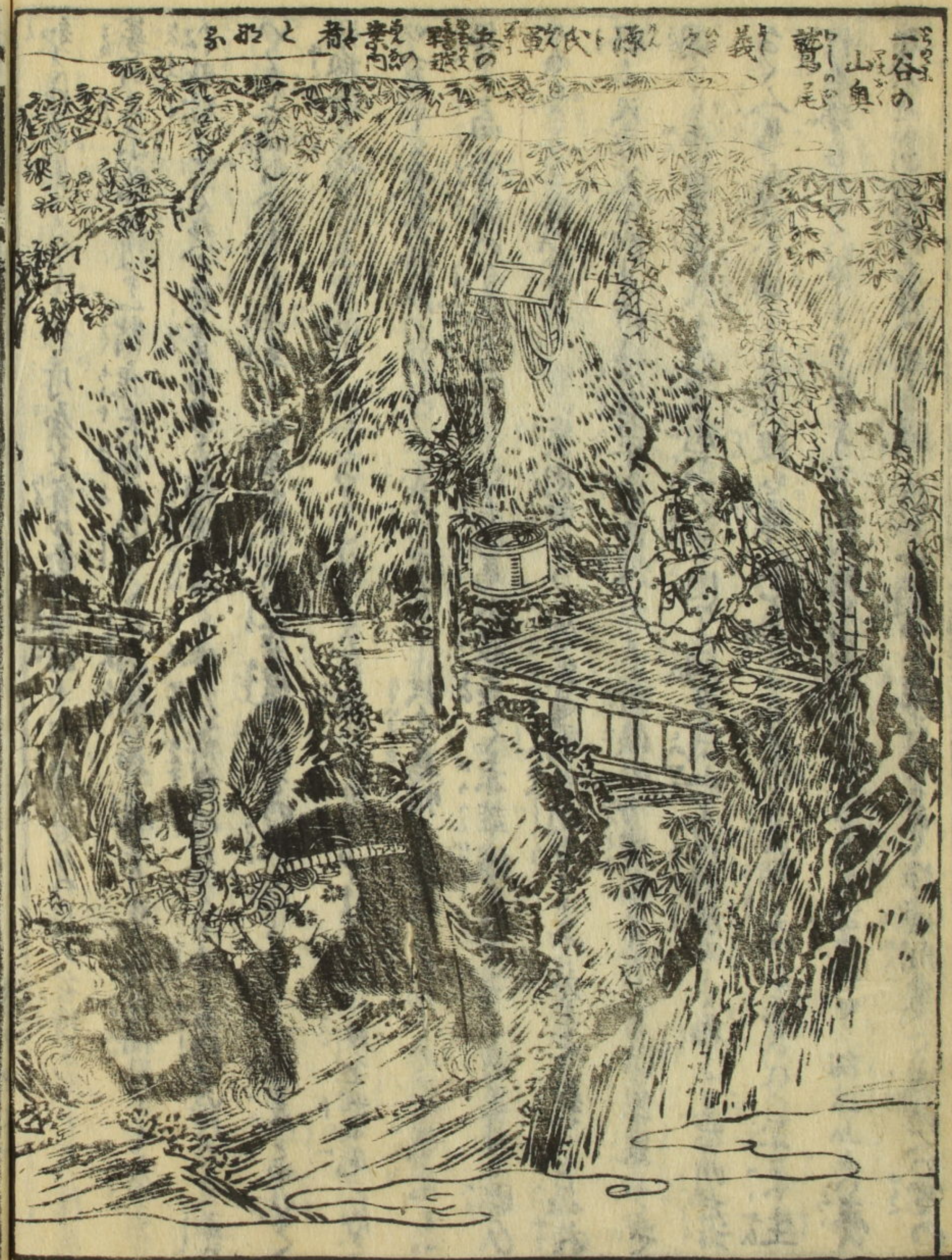
平将徳守の令して
 伊豫國住人高市武吉所
 高市原嶺を以て
 射とあつく勢の
 名譽ある所
 ありしを



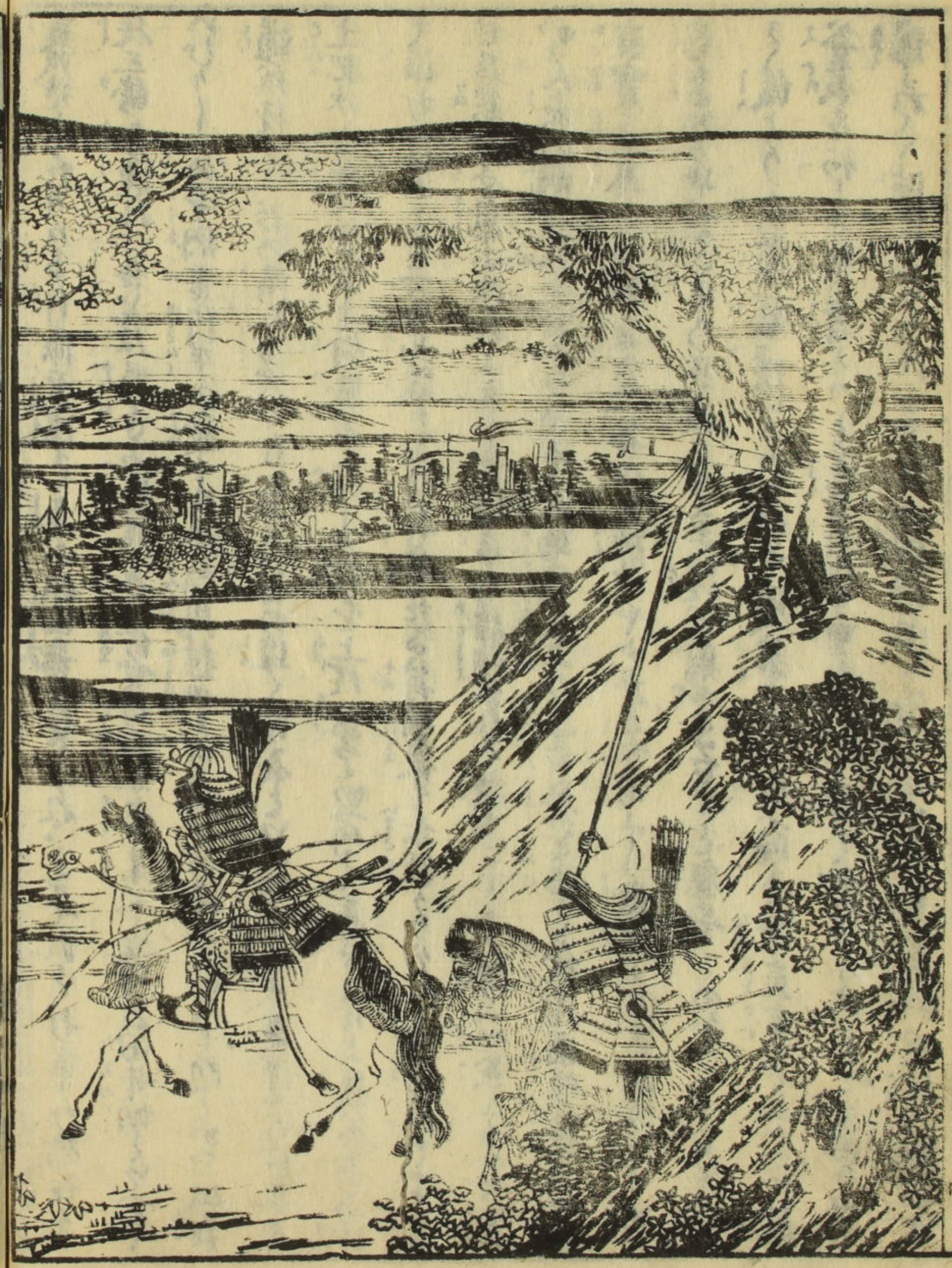
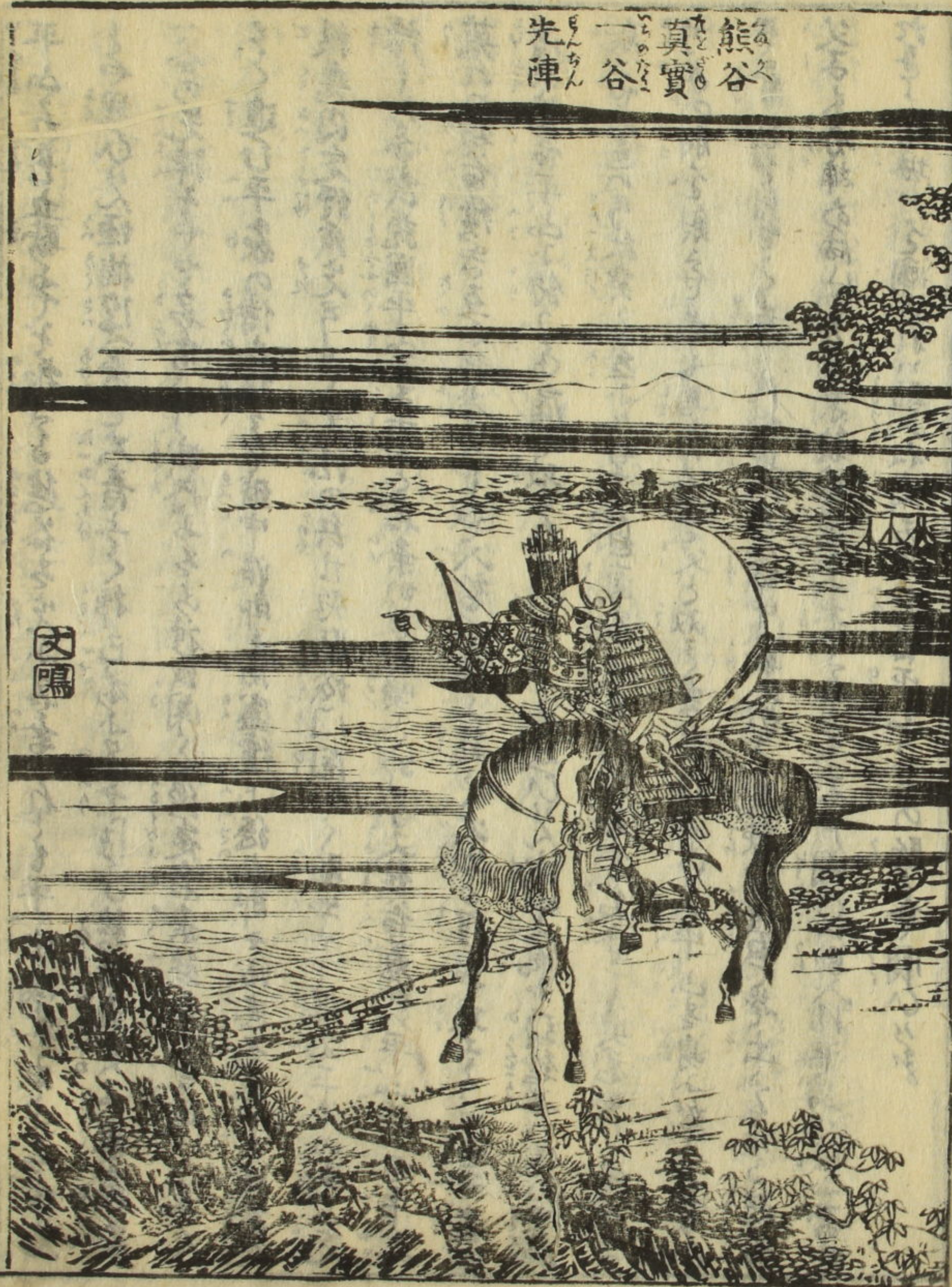
勇なり同日六日の未明一谷のふらへり唯麻一ツ出されり然と云は麻の下謀一足詠
高の所と覚る用をせしむるに修縁國高市清章が被を射る大將軍の傍を
共今麻と射一矢一の敵十人の防へ清章の麻と射を由臣くせ雲ひれを馬
追く疾ふり去れ小九郎師曹司下知し移ひなるは山のみ足之故一馬とも
損むるにこそ武藏坊辨慶と尋ひ山路本陰敷りて遠く谷の案内者尋ん
やや宮へ馬小系乾小向く十符町下て谷を窺ふ小出小人の見えたる打ふれ
へり一谷萱谷あり内小七十符ある所と六十符ある處中たみあふ品たる辨慶肉ふへ
申はれを録余兵衛佐殿朝敵討の院宣成賜て軍勢と指上せし平家都を薦ては
山小系系別師君搦手大將軍九郎師曹司のふれり一ゆと案内者ふまれの
佛使小武藏坊辨慶と尋ひ山は所の師着るまれの夜々あること申はれ老と尋
起上て烏帽子打着多く申はるるは老と尋ひ丹志國のふれ晴所か一春夏は移り討
秋をい苗侍落しを押し大なるど申て晝夜山小侍しを本根岩角かぬは
幸園身裏ては二十符車いり引はれお叶はれ作子良の小冠者と不敵の奴衆肉よく
知く惟呂貝と尋へて行ふるが成り知して進むせりの衣物も同色は徳義
善の弓小徳のよき射鹿矢ぬま指く車輪草を履たりける辨慶相具して老と尋
松明焼して心かを煩骨あせし輜車高く持たし師曹司と尋ひ小汝が弟新ははく老に
いふ事と同のい案を生年十七居るは山の鼻を覆く祝の祝ふけりける尾と申は
惟淑が名をいふせ同のい名をいふけりけり親の二所と申はるは女を執る尾三郎と
いふを一各案に我行名成達一義之をせし一は今鳥帽子親の引出物と花標ふま
管小白金筒の金へり力小鹿毛の馬小鞍を赤革織を甲青小具是日て賜ひ
たれはさうり従ひさうり一各の案内者より八條文司國貞州よりして老と尋ひ親も推
悲しは妻とも別は清奥平泉の館あり最後の市坪と尋ひ一は雪恩や老
園一清曹司といふ老若尾の案内者同のふは山とは鴨城と尋ひ一は雪恩や老
あく人馬も通ふ申し上七八段と席風をさうる馬と尋ひ砂文の小るるは草生
は馬蹄も止るのしを推り下立六段と岩磯をくさるも通ふおと細山山あり
なれたかの悪所をば麻を通くやや中鹿を推り世間寒く成れり雪の



谷の奥の山に
義経の源氏
の戦場の
跡の
親の
おと
の



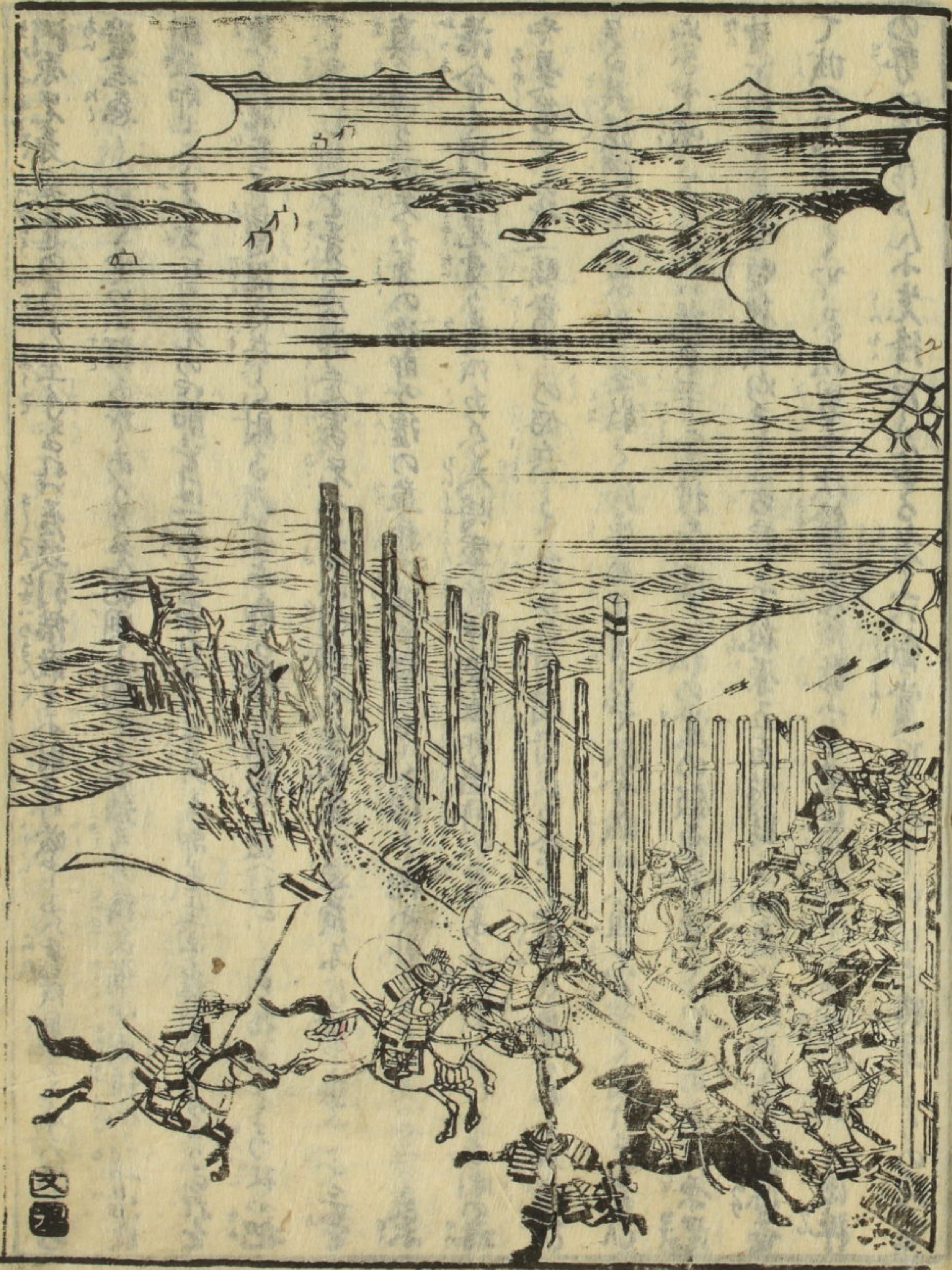
熊谷 眞實 一谷 先陣



平山にれど立騎せとて抱くる徳谷を先小名乗せしるも平空國をそ又名乗ん
とも思ひらん頃捕囚せし大青とて押已不名乗けし徳谷直実子息直家
二谷の先陣とてや名乗る城内を先捕囚聞て徳谷名乗徳谷父子提くる人
そく進じ平家の侍を誰ぞぞ城の中流即高直盛績上徳五郎を清忠光忠七若清
後藤内定経成先とて京流の兵廿餘騎城門閉りて馳せり保元平治の軍先
後したる武藏國平山季重と名乗けり喚くがふ又徳谷蒐れ平山季重平山
蒐れ徳谷季重互小我方とせ入智く搦搦と大物の徳谷攻めり平家の
寺共徳谷平山小銃り子痛く攻めり叶いとて徳谷城の中風を引徳谷馬の徳
身寄ぬまひ弓杖突く立小わ子息直家生年拾六歳也名乗て直家おけて飛つ
弓の肘を射せし是も馬より下で又と取くまけるあふ平山身小怒くあり
りの旗指を射せし安く思ひらん城中馳入りて其敵の首取て持出りたる徳谷
父子も分捕あはれしり末徳谷先小乗せしるも本戸開りて馳入り平山は後小乗
せしるも城戸を開れり馳入り備あは徳谷平山が二の馳を徳谷聞ひり

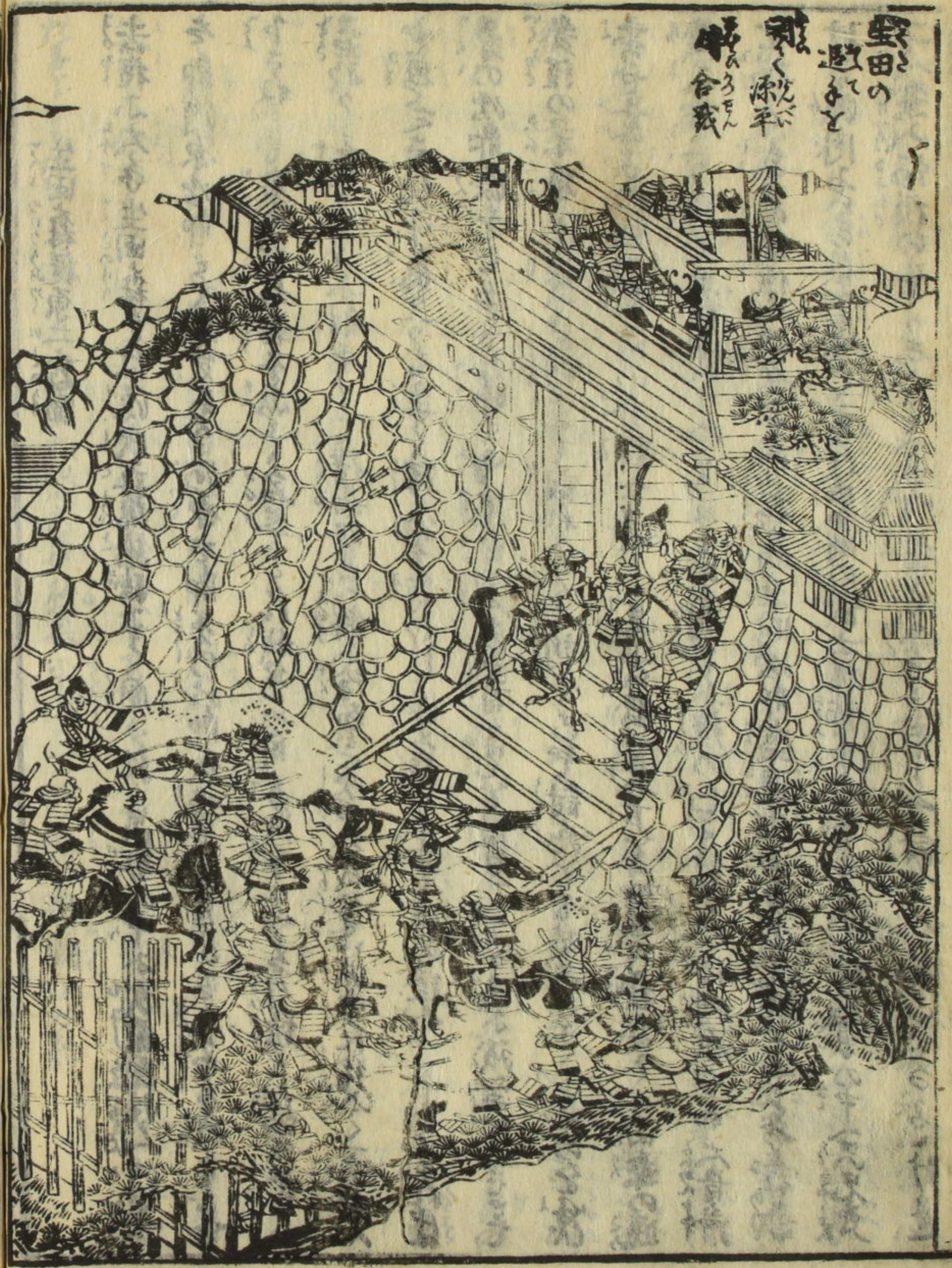
生田森提原二夜馳

去程小大子生田森をば源氏五萬餘騎とて周る其勢の中小武藏國住人河原
を即河原次郎とて兄弟あり河原を即弟のは即成喚く云々か大名を我とて
下されも家人の真名を必く名乗る我等自今下をて叶難く故成あふ
益取く矢とて不射せりて待居たり餘小冷あふ次身我等城の中に給今夫射
せ思ふされば千萬も生く人半有つて汝を殺し止く後の徳谷身と云んば
弟の次弟源をそりくと流く唯兄弟二人ある者か兄と討せり後小殘留たりて
衆程の末華とて保べき所をて討れんより一筋とて我討死ともせりそく下を我
寄せ妻子の許へ最後の分野を遣し馬少の騎で下下とは履弓杖突く生田森の逆
衆本城より幾く城の中へ入りたる星明ア小獲の毛ささるる河原を即大青
と揚ぐ武藏國住人河原を即私高直同次郎盛直生田森の先陣とて
ける城内をあれを聞く哀れ東國の武士提怖しき者まきりは大勢の中只兄弟
二人をい何れの半りもゆとてき唯そく愛せりそとて討んと云者も我らるるけ



文
四

野田の
遊園
遊園
遊園
遊園



河原兄弟宛々の弓上りなれば是れは攻引散々射り候中其は汝見く今ハハとの
愛志意一討せしむるはありは免兩國小園えたる強弓の精兵備中國位今ハハの愛
同五郎とそ兄弟あり兄の四郎とは一谷小五郎なり弟の五郎は生田森小ありはこれ
見く能書て皆保く兵と射る河原を即ち檻の胸板と後へはつて射指とて一谷小五郎
は病む所を弟の次郎走寄兄を肩小引去り生田森の逆後本に登りて候へり
真名也りの矢小身の次郎が檻の草摺の逆を射るべく因ト枕小卧ありは真名也り
落合と河原兄弟より首級あり大將軍初中絶云知盛卿の鬼多し入りはれは長剛の者
や是等とて我二騎當千の好兵と云はれ可憐者共々命多助と見ゆ
其は河原より敵等之敵く河原兄弟あり今候中へ直先急く討れまはひ
ぬふや喚りければ梶原平三は槍を聞くと私の黨の殿原不覺であとあはれ河原兄
弟と討せしむるも時能成ぬるも実やとて梶原五百餘騎生田森の逆後本に汝を
て城の内へ喚くは平次餘は先成馳へて進む同父平三使者とて之は後陣
の勢續くはらん小先鋒たる者ふい勸賞向る句一は由大將軍より候へ

此と云送るれば平次皆扣く

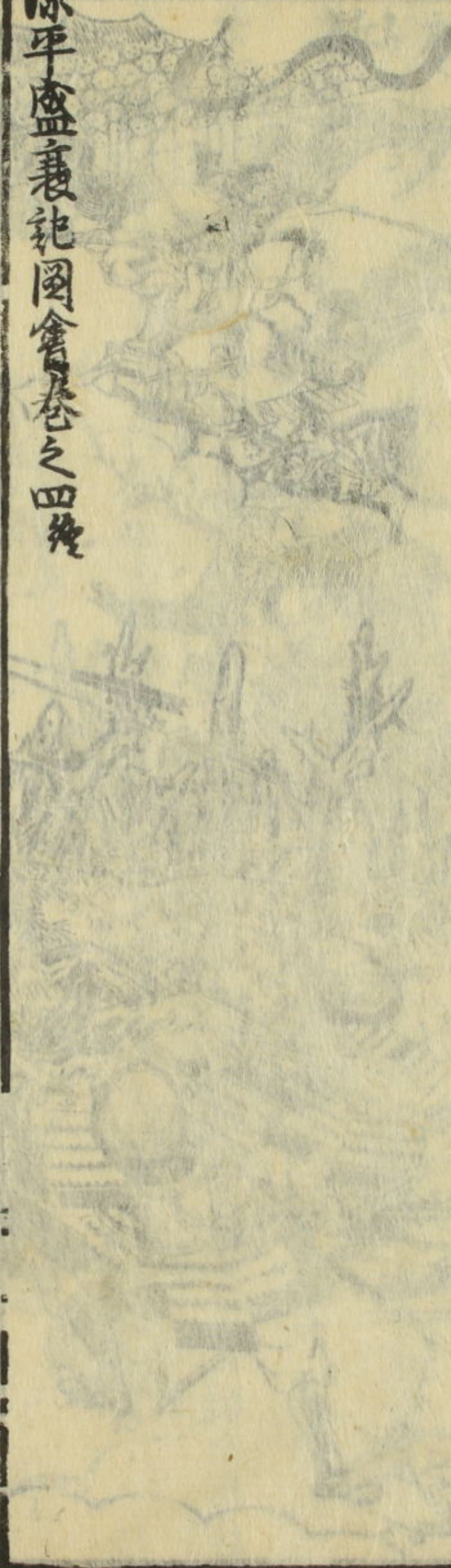
武士もさうはく之は侍射引く人の心もこのう

也申さば孫やと喚くは梶原は汝見く平次討むる者共景高討中を續
あやとて父の平三兄の源太同キ三郎續くは梶原五百餘騎の大勢故の中へ馳入置候
無盡蜘蛛子十文字小急敷く親と引く出されは嫡子源太を見へりは梶原良等
小源をわいふと問はれば好小深へて討れさせぬは誰人違ふも見えぬは誰人
也申されは梶原渡をこくと流る軍の先を馳とてふも子共の爲之源を討せし景時
命生ても何ふ甘ん返せやとて又取返す其後梶原登踏張立より大も聲揚て
むし八幡殿の後三年の清我小出羽國千福令澤の滅攻めひ一時生幸十六歳
や名棄く真先馳弓子の服を甲の并付の板小射付られ形く其は火成候と書
矢成射へし故射落し勸賞蒙り名を後代に上りは孫余權五郎景正小五代
の末業梶原平三景時とて東國小園一人當子の兵とて我とて人々いふ合へや
見来見は七喚くは今候中其は汝見く今ハハの愛



源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四
源平盛衰記 卷之四

源平盛衰記 卷之四



し

